

# 日仏東洋学会通信 第五号

Circularaire de la Société franco-japonaise  
des Etudes orientales, No. 5, mars 1986

一九八六年三月発行

## 目次

第四回日仏学術シンポジウムに参加して	福井文雅	1
日本側参加者紹介		4
全日程		7
日本側参加者の感想		33
欧米『道蔵』研究プロジェクト班による		
道蔵の電算機処理の現状	山田利明	40
第四回日本研究国際会議開催		42
学会活動	会員消息	43
新刊紹介	新入会員	44
	住所変更	44
	編集後記	44

## 第四回日仏学術シンポジウムに参加して

このシンポジウム(以下「コロック」と呼ぶ)に本学会が初めて参加するようになるまでのいきさつについては、すでに第二号、第三号の『学会通信』で説明してあるので、ここでは、それ以後の、実際に参加した結果だけを報告することにした。

しかしそれに先立って、これ迄懸案であった難問題二つについて述べておきたい。その難問題とは、日本側渡仏に当たっての渡航費と滞在費(半分)との調達と、参加者決定の件であった。しかし、幸いにも、渡仏時には両方とも心配なく解決できていた。

先づ第一の諸経費の件であるが、コロックへの参加呼びかけがフランス側からあった当初は、その調達は全く絶望的であった。東洋学部門のタイトルに出る「道教」が、中国や欧米では有名であっても、日本ではまだ殆ど知られず、知られていたとしても、儒教、仏教と比べればマイナーな研究評価しか与えられていないのが現状であるから、日本側責任者がいかに努力してかけ廻っても、どこからも最初の内は援助の期待薄であったことは、むしろ当然であったかもしれない。しかし、最後には、参加者のほぼ全員が文部省と国際交流基金とから援助を得ることができた。その間にあっては、本学会会員である酒井忠夫筑波大学名誉教授をはじめとして、日仏会館その他からの暖かい後援があった。特記して、改めて関係各位に感謝申し上げたい。

第二の参加者決定の問題は、各部門からの参加者は六、七人前後、と決められていたので、希望者が多くても少ななくても主催者は困るところであった。増えれば、その分はオブザーバーに廻って戴かねばならない。本学会は公募制をとっていたので、最後まで人数は確定しなかったが、最終的には参加者（つまり、発表者）が七人（その内、現地参加者一名と対論のみの担当者一名、女性一名を含む）、オブザーバー三名の計十名という理想的な人数に到着した。

それ以外に、酒井忠夫教授と金岡照光教授（東洋大学）の出席が早くから予定されていたのであるが、出発間際になって、御二方とも健康上の理由その他で参加をとりやめられたのである。しかし、出発までの準備期間中には、お二人からは、とりわけ酒井先生からは顧問格として、種々御教示を頂いた。残念ながら不参加にはなったが、お二人の存在は大きかったと言えよう。

因みに、フランス側参加者は、発表者十二名（その内、女性五）、技術協力者六名（その内、女性四）、オブザーバー多数であった。また、フランス側の招待で、中国から一名参加があった。参加者についての詳細は、後に記すプログラムについて見られたい。

フランス側責任者はクリストファ・シッペール Kristofer SCHIPPER 教授（フランス国立高等研究院宗教学科 文博）。オランダ出身で現在五二歳。右の宗教学科を『漢武帝内伝の研究』で卒業してから直ちに台湾に留学。道士（道教の僧侶）に成って八年近く彼地で暮した。従って、道教儀礼の研究では現在世界の第一人者である。シッペ

ールの漢訳名である「施博爾」（又は施舟人）で、数多くの『道蔵』関係一字索引を刊行している。

日本側責任者としては、フランスの主催委員会から、福井が指名された。なお、出発前の準備段階では、弥永信美氏が助力を惜しまれず、開会に先立って準備の為一足早くパリへ福井が発ったあとでは、日・仏間の連絡・まとめ役には山田利明氏が当たっていた。

コロックの詳細は、次の「日程」の中に全て盛りこんであるので、ここでは全体を通しての話を書いておこう。

参加者全員に共通する感想の第一は、実に厳しい、しんどい、しかし内容は実に充実したシンポジウムであった、ということである。オブザーバーは別として、日本人参加者のほとんどは、研究発表一時間（発表二〇〜三〇分、対論者の批判十五分、全員での討論十五分）の他に、対論者 *discussant* と議長（司会者）という仕事、つまり一人三役を嫌でも一度はつとめなければならなかった。人によっては、その他に、日本側を代表しての挨拶という大役もあった。

この三役（または四役）をこなす為には、他の発表者のペーパーにどうしても目を通しておかなければならない。しかし、日中はびっしりと討論が横行していて、他のペーパーなど読んでいる暇は無い。どうしても深夜まで勉強しなければならなかった。ペーパーのほとんどが、フランスへ着いてから手渡されたのであるから、手許に調べる資料も辞書もなかったことも、苦勞を増した大きな一原因であった。

会場は教室ではなくて、大邸宅の中の約十米四方の会議室が使われた。参加者全員が円形に坐り、各人の前には名札が立ててある。発表者は真中の黒板の前の席で発表し、議長はそれに相對している。その会場風景をヴィデオ・カメラが常に撮影しては、隣室と廊下のテレビ画面に流し、それをオブザーバーが見ている。会議室内にいる我々からは、従って、どのようなオブザーバーが、何人来ているのか、全く判らない。これでは、居眠りはおろか、小用に立つことさえ憚られた。

しかも昼食もコーヒー・ブ레이크も、会場の隣室で給せられたのであるから、結局、その間も討論は続いているわけであり、一人でこっそり休息などすることは不可能であった。このような状態が、毎日、朝の九時四十五分から夜の七時過ぎまで続いたのである。坂出教授がその感想文の中で、「こんなに敝しく疲れた学会は初めてだった。」と書き、オブザーバーであった広川氏が「フランス側のタフぶりに驚嘆した」のも当然であり、高橋教授は、「数年分の演習をこの一週間でしたような気がする。」とも言われたのである。

前述のように、夜は夜で調べものをしなければならなかったのであるから、夜の観光は勿論のこと、ワインを楽しんでもいられない。昼間でも（会場からは一步も外へ出られないのであるから）パリ市内見物や土産物の買物などへ行くことすらできなかった。

そのことを考えてくれたのか、途中の九日をルーアン市見学のバス旅行に当ててくれたのであるが、これまた早朝から夜までの旅で、まだ発表のすんでいない人や、他の役が当たっている人にとっては気もそ

ぞろの慰安であつたらしい。

参加者の殆どが、フランスかアメリカ、中国での勉学生活の体験者ではあつたが、大半がパリは初めてであり、国際会議に初めての人も多く、まして、議長や対論者の役をつとめるのは、殆ど全員が初めての経験であつた。しかも、上述のようなハード・スケジュールと不馴れた環境ではあつたが、日本側は大いに健闘した、と私は思っている。

フランス側とは違って、日本側には道教だけを専門にする研究者はいなかつた。（日本全国でも、いわゆる道教の専門家は五指に満たないのではないか。）一方、日本の伝統として、儒学や中国仏教史や東洋史と併せて道教を研究する人達ばかりで、しかも、坂出、高橋の両教授と私の他は、皆な二〇代、三〇代の若手ばかりである。（もっとも、フランス側は、「日本の大家達のこととは十分判っているので、大学院クラスの参加が望ましい」と元来強く要望して来てはいた。）出発間際になって、酒井、金岡という強力なメンバーを欠き、フランス側の独・伊・蘭を含む俊鋭の専門家と對抗できるのか、と危ぶむ声も、実は日本出発以前では、周囲から聞えてこないでもなかつたのである。しかし、責任者としての私はその点はさして心配はしていなかつた。先に述べたように、どこからの資金援助もなくても、自分で参加したいという熱意の人達ばかりだったからである。行く前から、意気込みが違つて見えた。「いくらかでも費用が出るなら行つても良い」というような人が、国際会議の場合にはよくいるものである。今回は、

そのような自惚れの人は一人も現われなかったことは幸いであった。恐らくは、そのような人であれば前述のようなハード・スケジュールにはついて行かれなかったであろう。

それにまた、若いということは素晴らしいことである。ひとり、ハード・スケジュールに耐え得る体力に恵まれているばかりではなく、素直に、「平常心」を持って欧米人研究者と討論ができる。皆な、決して流暢とは言えないけれども、とにかくフランス語、英語、中国語をチャンポンにでも使つて、こみ入つた話の時はお互いに通訳し合つて、気持を合わせて全てを乗り切つたのである。決つていた公用語は、フランス語であつた。ところが、責任者のシッペール氏自身が、発表では中国語を使った。対論者が私であつたから、その意図は明瞭であつた。国際会議では、そのようなハッピングは珍らしくない。司会の高橋教授と私は慌てず、対論の最初を中国語で始め、フランス語に切りかえた(後の28頁参照)。フランス側は通訳を四人用意してしてくれたのであるが、専らロペール氏一人で終つたようである。

そのようにして、ほとんど小過さへ無く、無事ロロックを終えた、と私は思っている。フランス側も、「これほど本當の意味で議論し合え、お互いに意見の交換ができた会議は始めてである、発表もバラエティに富み、実に良いテーマが多かつた」と喜んでくれた。

人間は疲れてくると、つまりらぬことで仲間内にいさかいが生じたり、病氣や盗難などという不慮の災難におそわれるものである。日本側責任者として、ひそかにそれを心配していたのであつたが、不思議な位

に、すべて杞憂であつた。

その意味で、日本側出席者全員に対して、この紙上を借りて御礼申し上げなければならぬ。また、さし出がましい言動をとつたかもしれないことに対しては、責任者としての立場上からのことで、決して他意あつたことではなかつたことも参加者各位には申し上げて、お許し願わなければならぬ。そして最後には、言うまでもなく、いたれり尽せりの歓迎 *charmante hospitalité* で終始我々を遇してくれたフランス側全員に対して、心から御礼を申し述べねばならない。

そこで、これから記すロロックの全貌については、フランス文も添えることにする。なお、フランス文プログラムは、フランス側責任者のシッペール教授にも送つて確認してもらつたものである。

日本側参加者には、発表要旨や感想など、全てを含めて合計四百字詰十枚以内の報告をお願いした。最初の参加者紹介欄には、一人五字以内で最近の業績も記してある。(以上、福井文雅記)

#### LISTE DES PARTICIPANTS JAPONAIS:

日本側参加発表者 (A B C 順)

○福井 文雅 早稲田大学 文学部教授 (中国宗教史) —— 日本

側責任者、日仏東洋学会主幹 (事務局長) 元フランス政府留學生

Monsieur FUKUI Fuminasa Professeur à l'Université Waseda,

Faculté des Lettres, Département des Etudes de la Philosophie

orientale, Histoire des religions chinoises: Secrétaire général de

La Société fr.-j. des Etudes orientales; ancien boursier du G. F.

明社(一九七五年) A STUDY OF THE BUDDHIST MANU-

——隋唐・五代の儒仏道三教における氣(小野沢他編『氣の思想』東大出版会、一九七八) 中国における般若心経觀の変遷(『東方学』64号、一九八二) 道教と仏教(平河出版社。『道教』巻二、一九八三。同巻一、巻三にも他のテーマで二点執筆) 敦煌と中国仏教(共編著。大東出版社『講座敦煌 7』一九八四) 大乘仏教と中国思想(春秋社『講座大乘仏教』10 一九八五)

SCRIPTS OF DUNHUANG: CLASSIFICATION AND METHODOLOGY (1984) 『八宗派別』日本の仏教、天台宗、円仁(小学館、一九八五)

○川崎ミチヲ 東洋大学 非常勤講師(中国文学) (本年四月から専任講師)

○坂出 祥伸 関西大学 文学部教授(中国哲学)

Mademoiselle KAWASAKI Michiko Chargée de cours à l'Université Tôyô, Littérature chinoise (à partir de l'avril, Chargée de conférences régulière)

Monsieur SAKADE Yoshinobu Professeur à l'Université Kansai, Faculté des Lettres, Philosophie chinoise

——敦煌本十二時—禅門十二時(1)——について(東洋大学大学院紀要第15集・一九七九) 校異試訳『敦煌本法華十二時』—ペリオ第三—一三号写本を中心として—(『東洋学研究』第14号・一九八〇) 敦煌本定格聯章について(東洋大学大学院紀要第18集・一九八二)

『中国近代の思想と科学』(同朋舎一九八四) 風の観念と風占——中国古代の擬似科学——(新田大作編『中国思想研究論集』雄山閣一九八六) 彭祖伝説と『彭祖経』(山田慶児編『新発見中国科学史資料の研究』論考篇。京大人文科学研究所、一九八六) 張湛『養生要集』の復原とその思想(『神田喜一郎博士追悼中国学論集』同論集刊行会、一九八六) 禹歩小考(『道教と宗教文化』平河出版社、一九八六)

○京戸 慈光 コレーシユ・ド・フランス東洋学院院日本学高等研究所 所助手兼司書(中国仏教史)

○高橋 稔 東京学芸大学教授(中国文学)

Monsieur KYODO Jikô Bibliothécaire-vacataire à l'Institut des Hautes Etudes japonaises du Collège de France, Histoire du bouddhisme chinois

Monsieur TAKAHASHI Minoru Professeur à l'Université Gakugei de Tôkyô, Littérature chinoise 在外研究でフランス留学

——『出定後語』(隆文館、一九七二年) 『天台大師の生涯』(第三文

——『中国の古典文学』所収。一九八一、東大出版会刊) 六朝唐小説集(六朝志怪篇担当) (西岡晴彦と共訳著。一九八三) 学芸研究社刊。「中国の古典」32) 桃源伝説と桃花源記(一九八三) 学芸院女子短期大学紀要) 中国古代の史家に見る民間伝承撰取の態度について(一九八四、三月『学芸 国語国文学』へ東京学芸大学国語国文学会誌) 中国における説話文学の諸相——中国

——『出定後語』(隆文館、一九七二年) 『天台大師の生涯』(第三文

——『中国の古典文学』所収。一九八一、東大出版会刊) 六朝唐小説集(六朝志怪篇担当) (西岡晴彦と共訳著。一九八三) 学芸研究社刊。「中国の古典」32) 桃源伝説と桃花源記(一九八三) 学芸院女子短期大学紀要) 中国古代の史家に見る民間伝承撰取の態度について(一九八四、三月『学芸 国語国文学』へ東京学芸大学国語国文学会誌) 中国における説話文学の諸相——中国

——『出定後語』(隆文館、一九七二年) 『天台大師の生涯』(第三文

——『中国の古典文学』所収。一九八一、東大出版会刊) 六朝唐小説集(六朝志怪篇担当) (西岡晴彦と共訳著。一九八三) 学芸研究社刊。「中国の古典」32) 桃源伝説と桃花源記(一九八三) 学芸院女子短期大学紀要) 中国古代の史家に見る民間伝承撰取の態度について(一九八四、三月『学芸 国語国文学』へ東京学芸大学国語国文学会誌) 中国における説話文学の諸相——中国

——『出定後語』(隆文館、一九七二年) 『天台大師の生涯』(第三文

——『中国の古典文学』所収。一九八一、東大出版会刊) 六朝唐小説集(六朝志怪篇担当) (西岡晴彦と共訳著。一九八三) 学芸研究社刊。「中国の古典」32) 桃源伝説と桃花源記(一九八三) 学芸院女子短期大学紀要) 中国古代の史家に見る民間伝承撰取の態度について(一九八四、三月『学芸 国語国文学』へ東京学芸大学国語国文学会誌) 中国における説話文学の諸相——中国

——『出定後語』(隆文館、一九七二年) 『天台大師の生涯』(第三文

——『中国の古典文学』所収。一九八一、東大出版会刊) 六朝唐小説集(六朝志怪篇担当) (西岡晴彦と共訳著。一九八三) 学芸研究社刊。「中国の古典」32) 桃源伝説と桃花源記(一九八三) 学芸院女子短期大学紀要) 中国古代の史家に見る民間伝承撰取の態度について(一九八四、三月『学芸 国語国文学』へ東京学芸大学国語国文学会誌) 中国における説話文学の諸相——中国

における民間伝承の記録と説話文学との関係について（一九八四、九月 至文堂『国文学 解釈と鑑賞』所収）

○田中 文雄 大正大学 総合仏教研究所研究員（中国仏教史）

Monsieur TANAKA Fumio Attaché à l'Institut des Hautes Etudes des bouddhiques de l'Université Taishô, Histoire du bouddhisme chinois アメリカ・カリフォルニア大学留学

——六朝知識人の五戒理解の側面（一九八二、豊山教学大会紀要）  
六朝応報論争の一考察（一九八四、大正大学大学院論文集） 身体へか  
らだの Mysticism 論（共著）一九八四、大正大学総合仏教研究所  
年報） 太平経の還神法について（一九八四、牧尾先生記念論文集  
『中国の宗教・思想と科学』）『五輪九字秘釈』の背景思想に関する一  
管見（一九八四、豊山教学大会紀要）〔現在は、愛国学園短大講師〕

○山田 利明 大正大学 文学部 助手（中国学）〔本年四月より、

東洋大学 専任講師〕アメリカ・カリフォルニア大学留学

Monsieur YAMADA Toshiaki Assistant à l'Université Taishô,  
Faculté des Lettres, Département de la Sinologie, Si-  
nologie (à partir de l'avril, Chargé de conférence  
régulier à l'Université Tôyô)

——神仙道（『道教』1 平川出版社、一九八三）道蔵十二類成立に  
関する一資料の背景（牧尾先生記念論集『中国の宗教・思想と科学』  
国書刊行会、一九八四） 靈宝五符序の図讖的性格（『讖緯思想の総合  
的研究』 国書刊行会、一九八二） 仙伝類（『敦煌と中国道教』——講

座敦煌4——大東出版社、一九八三）

○ Observateurs japonais : 日本側オブザーバー

広川堯敏 大正大学 仏教学部 講師（浄土学）

Monsieur HIROKAWA Gyôbin Chargé de cours à l'Univer-  
sité Taishô, Faculté des Etudes bouddhiques, His-  
toire de l'Ecole de la Terre Pure フランス留学

明神 洋 早稲田大学大学院 東洋哲学専攻 博士課程学生（中  
国宗教史）

Monsieur MYOJIN Hiroshi Doctorant à l'Ecole des Hautes  
Etudes de l'Université Waseda, Département des  
Etudes de la Philosophie orientale, Histoire des  
religions chinoises

山田 均 早稲田大学大学院 東洋哲学専攻 修士課程学生（タ  
イ仏教史）現在、早大・タマサート大学間交換留学生  
であるため、バンコックから参加

Monsieur YAMADA Hitoshi Etudiant à l'Ecole des Hautes  
Etudes de l'Université Waseda, Département des  
Etudes de la Philosophie orientale, Histoire du  
Bouddhisme thaïlandais : actuellement, habite à  
Bangkok, à titre de boursier de l'Université Tha-  
mmasat, grâce au traité d'échange de chercheurs en-  
tre l'Université Waseda et l'Université Thammasat.

○ Observateurs français : フランス側オブザーバー

シンポジウム会場は、円卓会議形式になっていて、会場へは参加者しか入ることが許されなかった。会議の状況は、室内のウィデオカメラを通して、廊下に置かれたテレビのスクリーンに映し出され、それを傍聴者は見る事になっていた。従って、会場内にいた我々には、どのような方々が来聴されたのかを知るすべは無かったのであるが、知り得た範囲では、次の方々が来られた。

Mademoiselle Francine HERAIL, Professeur à l'Université de Paris, japonologue

パリ大学教授 フランシヌ・ヒライ、嬢 (日本文学)

Monsieur Guy GAGNON, C.N.R.S., japonologue

国立学術研究センター研究員 ギー・ガニョン (日本文学)

右の二人は後に入室して、討論に参加した。

Monsieur Jean-Pierre DIENY, Directeur d'Etudes à l'E.P.H.E., sinologue

国立高等研究院教授 ジャンピエール・ディエニ (中国学)

Monsieur Donald HOLZMAN, Directeur d'Etudes à l'E.P.H.E., sinologue

同 右 ドナルド・ホルツマン (中国学)

Monsieur Alfredo CADONNA, Professeur-assistant à l'Université orientale de Naples (Italie), sinologue

イタリア・ナポリ東洋大学 助教授 アルフレド・カドンナ (中

国字)

Monsieur Adrianus DUDINK, Chercheur, Fondation neerlandaise de la Recherche Pure (Z.W.O.), Leyde, Hollande, sinologue

オランダ研究財団 (ZWO) 研究員 アドリブヌス・ドゥディンク (中国学)

Monsieur Michel STRICKMANN, Professeur à l'Université de Californie, Berkeley, participant correspondant, sinologue

〔紙上参加〕カリフォルニア大学バークレー校 ミッシェル・ストリクマン教授 (中国学)

○ Aides techniques 技術協力 : (Interprétation 通訳) Projection de film 映写 etc. その他

— Messieurs : Jean-Noël ROBERT, ジャンノエル・ロベール, Guy GAGNON, ギー・ガニョン, KYODO Jikō, 京可慈光

— Madame : Irène SCHAEFFER, イレーヌ・シヤマンエル夫人, — Mesdemoiselles : FUKUI Sumi, 福井純, HSU Chia-en, 許家恩

KWONG Hing-foon, 鮑潔敏

QUATRIEME COLLOQUE PLURIDISCIPLINAIRE FRANCO-JAPONAIS

第四回日仏多領域学際研究集会

〔別名：第四回日仏学術シンポジウム〕 第四回日仏ロマン〕

Dimanche 20 janvier 1984

10. 00 Réunion du Conseil scientifique de la Maison franco-japo-

naise, au Ministère des Relations extérieures, Direction  
de la Coopération scientifique et technique, Sous-Direction  
des Sciences Sociales et Humaines.

Président: Monsieur Philippe GUILLEMIN, Sous-Directeur  
des Sciences sociales et humaines

“Préparation du 4<sup>e</sup> Colloque pluridisciplinaire franco-japo-  
nais”

日仏会館学術委員会（ソリ） シンポジウム準備会：ソラン  
メ外事省にび。

議長：フュリッブ・ギロマン（同省、科学技術協力局、社会・  
人文学課長）〔この議事録は同年三月五日付けの、日本に郵送  
されて来た。〕

◎ Section orientaliste 東洋学部

organisée par la Société franco-japonaise des Etudes orientales,  
avec le concours du Projet Tao-tsang (Fondation Européenne de  
la Science)

（日仏東洋学会主催、ヨーロッパ学術財団・欧米『道蔵』研究プロ  
ジェクト後援）

Sujet: Taoïsme et culture japonaise (主題: 道教と日本文化)

Vendredi 10 mai 1985 一九八五〔昭和六〇〕年五月十日（金）

20. 30 Assemblée préparatoire française, chez le Professeur Kris-  
tofer SCHIPPER

フランス側参加者打ち合わせ会（シブーン教授宅）

Dimanche 15 septembre

14. 00-17. 00 La dernière réunion des participants japonais avant  
leur départ, à la Maison franco-japonaise de Tôkyô, Salle  
de Foyer

◎ 九月十五日（日）

十四時～十七時 日本側参加者の出発前最終打ち合わせ会・発表リハ  
ーサル〔東京・お茶の水・日仏会館一階フォワイエ  
ラビ〕

Dimanche 22 septembre

11. 00 Départ pour Paris de Fukui, responsable japonais

◎ 九月二十二日（日）日本側責任者として、早めにパリに向けて福  
井出発

Mardi 24— samedi 28 septembre

Réunions préparatoires des responsables franco-japonais

◎ 九月二十四日（火）～二十八日（土）

日・仏責任者同士による学会下準備・プログラム作製・打ち合わせ  
会

Dimanche 29 septembre, soir



Arrivée à Paris de la Délégation japonaise

◎ 九月二十九日(日)夜 各部門の日本代表团、パリに到着

Lundi 30 septembre

11.30 Cérémonie d'ouverture du Colloque et la réception, organisées par le Ministère des Relations Extérieures (Pavillon Kléber, 7, rue Cimarosa, Paris 16<sup>e</sup>)

14.00 Première assemblée des participants de la Section orientaliste, à l'Institut d'Asie, 1er étage, 22, Avenue Président-Wilson, Paris 16<sup>e</sup>

18.00 Réception offerte par l'Ambassade du Japon, dans les Salons du Service Culturel et d'Information, 7, rue de Tilsitt, Paris 17<sup>e</sup>

◎ 九月三十日(月)

十一時半 フランス外事省主催 合同開会式 並びにレセプション  
〔会場：パリ十六区―凱旋門近くのークレバール館〕

十四時 東洋学部門 参加者 初会合〔会場：十六区 マジヌ総合研究所二階〕

十八時 日本大使館主催 歓迎レセプション〔会場：十七区―凱旋門前―文化・広報センター内サロン〕

～ Dimanche 6 octobre après-midi

Temps libre. Du 6 soir au 12 octobre matin, les participants japonais, y compris les observateurs, ont logé en commun

dans l'Hôtel de Turenne, 20, avenue de Tourville, Paris 7<sup>e</sup>.

tel: 705-9992, 555-351.

☆ これ以後、十月六日(日)午後までは自由行動。渡されたフル・ペーパーを読んで議長や対論者に指定された場合の準備に入ったが、余りにも大量の発表資料で、しかも辞典類や参考文献は手元に無く、一週間の準備期間内でも、調べ終えることなど、到底出来るわけがなかった。日仏双方とも、発表要旨すら、出発間近になって届き、自分の発表準備もあって、十分下調べする余裕はなかった。日本人参加者は、オブザーバーも含めて、六日夜から帰国する十二日(土)までは、フランス側の用意した「オテル・ド・チュレンヌ」(パリ第七区)に全員が合宿することになった。

Programme de la Section orientaliste

東洋学部門シンポジウム日程

à la Fondation Hugot du Collège de France, 11, rue de l'Université, Paris 7<sup>e</sup>

会場：ユーゴー会館 (コレージュ・ド・フランス付属施設  
パリ第七区 大学通り十一番地)

Lundi 7 octobre

9.45 Allocutions d'ouverture de la Section orientaliste (en français):

— Monsieur Jacques GERNET, professeur au Collège de France, membre de l'Institut

— Monsieur FUKUI Fumimasa, professeur à l'Université

Waseda

© 十月七日(月)

九時四十分 東洋学部門 開会の辞(仏文)

フランス側：ジャック・ジェルネ(コレージュ・ド・

フランス教授 フランス学士院会員)

日本側：福井 文雅(早稲田大学教授)

福井挨拶要旨——責任者としての謝辞から始め、日本側参加者が来会するまでのいきさつを説明。すなわち、日仏東洋学会内部での公募による参加であり、従って、道教研究で著名な方であっても、公募に尽なかつたり、日仏東洋学会に入っていない人は含まれない。一方、日本中国学会や日本仏教学会がコロックと重なる為、その方の先約があつて、参加を断念した会員もいる。酒井、金岡両教授の突然の参加中止により、元来はオブザーバーで参加するはずであつた田中文雄氏が、代つて対論者の中に入る。不参加の方々からの「宜しく」という言葉を皆さんに伝えたい。

我々は必ずしも道教の専門家ではない。道教と関係はしつつも、別の分野の研究テーマを各人は持っている。しかし、コロックの主テーマは「道教と日本文化」であるので、それに合致するような問題をあえて選んで、ここには参加した。構成メンバーも若い人が多いので、

今後の為にも、大いに意見の交換をしたい。

10.00 Première séance

Président : Monsieur Jacques GERNET

— Monsieur FUKUI Fumimasa : "Problèmes de l'adoption du titre chinois *tiên-huang* pour l'empereur du Japon"

Discussant : Monsieur Léon VANDERMEERSCH

十時

(第一回研究発表) 議長：ジャック・ジェルネ  
— (発表者) 福井文雅：

「天皇」号の成立についての問題点(仏文)

対論者：レオン・ヴァンデルメルシュ

福井発表要旨——私は日本古代史の専門家ではないが、この発表をするのは次のようないきさつと理由がある。数年前に日本で国際東洋学会議 CISHAN が開かれた時、私の関係した「儒教と道教」部門で天皇号の成立が少し問題になったことがあり、シッペール教授が、唐の高宗が「天皇」と名乗った事実を挙げた。その時には、どういう意味でこの例を挙げたのか不問のままに終ってしまったが、もしかすると、日本の天皇号は高宗以後と思つていたからではなからうか？一方、日本の古代史を何でも道教の影響と見なす或る日本人教授がおり、その方はバリで講演して、「天皇」号の道教由来説を講じて、大いに影響を残しているらしい。とすれば、フランスには、シッペール説とその某日本人教授説とが併立するわけで、それに対しては、日本人で

ある我々が公平に解答を与える責務がある。特に最近、道教と日本文化との影響関係が話題になっているだけに、このテーマの解決は急務である。

その某教授は、いかにも自分の創説であるが如き話をされたらしいが、実は日本ではそれは津田左右吉以来、周知の説であり、しかも、津田説以上に現在では研究ははるかに進み、深化している。津田、肥後和男、福山敏男、渡辺茂、東野治之、宮崎市定、井上光貞、田中卓、栗原朋信その他の諸氏の説を紹介。(諸学説は極めて複雑なので、私の用意したフル・ペーパーは後で読んでもらうことにして、パリに着いてから、それらを一覧表に作り、コピーして配布し、それに依って説明した。)  
「天皇」号の学説史 *étude bibliographique* を述べ、日本人教授の説にしる、シッペールの説にしる、日本では既に検討済みであり、しかも他にも有力な学説はあり、問題は簡単ではない。

しかし、唐高宗が「天皇」を名乗った史実は一つの重要な点であり、恐らくは、その頃から後、日本では「天皇」号は公称となったのではない。最近の研究者は、それ以前の時代の遺文で「天皇」の語を含むものの信憑性を否定するが、その論断は推論を重ねた上での結論のように思え、全面的に否定する意見には不安が残る。「天皇」号は、やはり推古朝の七世紀初めあたりから使われていたのであるが、それが公称として正式に成立(確立)するようになったのが、唐の高宗からの影響以後、つまり持統天皇の七世紀末以後というように考えるのが、歴史の流れとしては穏当ではないだろうか？

ここにいたると、「天皇」号成立の問題がもつれていた原因の一つは、「成立」という語の使い方にあったように考えられる。なぜならば、日本語で「成立」は、事象の始めも、その途中も、終りを意味するからである。実例をもって示すことができるのであるが、従来の研究では、その意味を漠然とさせたまま議論が進んでしまい、無用の混乱が生じている場合が少なくないようである。

〔討論に移ってからは、道教の術語が日本の古典や制度の中に見出せる、ということ、道教の影響を云々する傾向がフランス人の中にもあるように見えた。しかし、それは典籍から得た抽象的な、知識としての道教(思想)からの影響論である。「道教」の影響を問題とする時には、「生きた宗教」としての道教が、どこまで日本古代に入ったか問われねばなるまい。そうなると、その痕跡は、今ではほとんどたどれないのであり、その意味では、道教の日本への影響を強調することは誤りである、と言わざるを得ない。〕

11.00 Pause (coffee-break)

11.30 — Madame Isabelle Robinet, professeur à l'Université d'Aix-Marseille: "La notion de *zing* dans le taoïsme et son rapport avec celle du confucianisme"

Discussants: Messieurs FUKUI Fumimasa et TAKAHARA

SHI Minoru

十一時 休憩(コーヒー・ブレイク)

十一時半 — イザベル・ロビネ夫人(エックス・マルセイユ大学 教

授) ..

道教における「性」概念と儒教の「性」概念との関係(仏文)

対論者：福井文雅、高橋稔

福井——宋学の術語のフランス語訳が頻繁に出て来て、しかも拼音表記だけで、漢字で原語が示されていないので、発表者の議論について行くのは極めて困難であり、時には難渋でさえあった。難渋に聞えたもう一つの理由は、発表者の考えなのか、扱っている書物自体の思想なのか、その間の区別がはっきりしていない発表の仕方にもある。説明ではなくて、解釈を示して欲しい。

〔右の論評に対してロビネ女史は、「私は元來說明をのみ心掛けていたので、解釈は目的としていない」と答えたので、福井は驚いた。また、ヴァンデルメルメルシユ教授は、「発表者と扱う書物の間に区別をはっきりつけて語るのには、日本語とは違って、フランス語では難かしい。漢字そのままを使えず、どうしても翻訳しなければならぬから。」と述べた。〕

発表者は、もっぱら性と命を論じているが、道教との関係から論ずるのであれば、この性と命と表裏一体を成す精・神・気、つまり「三奇」にこそ注目すべきではないか？ この「三奇」は、この術語の存在すらほとんどの研究者が知らないが、福井はかつて論文で発表したことがある。一九七八年、東大出版会刊『氣の思想』を参照されたい。高橋——同女史の報告の中で、重要な術語が、時として、その語本来

の多義的な性格を無視して用いられていることが感じられた。彼女の言によれば、自分の解釈を加えることはせず、資料中に現れるままの形で整理したと言うのだが、特に「心」ということばの意味に関して、そのことばの用いられている場によって、明らかに意味が分岐しているにもかかわらず、それが同一視されていると感じられたので、会議終了後、改めて文書によって疑問点を伝えした。

12:30 Déjeuner

14:00 Deuxième séance

Président: FUKUI Fuminasa

— Monsieur TAKAHASHI Minoru: "Un culte populaire chinois au Japon: à propos du 'Message laissé par Dongfang Shuo'"

Discussant: Monsieur Marc KALINOWSKI

十二時半 昼食

十四時 (第二回) 議長: 福井文雅

— 高橋稔: 『東方朔置文』についての考察 — 近代日本に伝存せる古代中国の民間信仰の一例(仏文)

対論者: マルク・カリノフスキ

高橋発表要旨——前言として、ここでいう民間信仰とは仙人東方朔に対する信仰を意味し、日本においては中世以来仙人東方朔に対する信仰が盛んで、この仙人を讃えた謡曲すら作られる程であったことを述

べ、次いで、江戸時代の始め頃から、東方朔の名を標題に掲げた庶民のための占いの本が現れ、他を排して広く長く民間に行われるようになったことを述べた。

そして、前言の第二点として、私が「東方朔置文」と出会った事情と、これが中国古代の民間伝承を研究する際に、有効な資料として働くものであることを述べた。

すなわち、私が「東方朔置文」と出会ったのは、「おしら神」研究の実地踏査の目的で遠野市を訪れていた折であったこと、わが国東北地方に伝わる「おしら神」の祭文が、「搜神記」や「神女伝」に見える「蚕の由来」の話と深くかかわっているようだということは、古くから唱えられていながら、その議論は、すべて話の筋の類似から来る推測でしかなく、両者の間の長い時空のはざまを想像によって埋めるところに、どうしても不満の残るものであったこと、そして、「東方朔置文」の存在は、その空白を埋めるための傍証として働くものであることを述べた。

そもそも、「搜神記」や「神女伝」中の「蚕の由来」の話の筋が「おしら神」の祭文の語る物語の筋に類似していながら、いまひとつ両者を結びつける決め手を欠くのは、東北地方の「おしら神」の話が、農家における蚕神の祭りとは結びつきつつ伝承されているのに対し、中国古代の「蚕の由来」譚は、その話の末尾に少々の祭祀にかかわる叙述を含みながらも、説話資料の農村の祭祀との結びつきを、外側から語ってくれる裏付け資料を欠いていることによるのである。その点、

「東方朔置文」の場合は、その文書の内容が、そもそも説話ではなくて、農耕のための占いのことに他ならないのだから、東方朔の名を冠したこの種の書物が、古代中国から順次時代を下り、国境を越えて近代日本の東北地方にまで伝えられたことが確認できれば、それがとりも直さず、農耕行事の一環としてこの書物を利用することが東方朔の信仰と結びつきつつ伝えられたという事実を見たことになる。

そして、農耕と養蚕とが農家における男女間の分業によって、両者共存しつつ行われてきたことが、中国において牽牛織女の伝説が語られ始めて以来の長い農村の習慣であったことを考えれば、農耕に関する信仰として東方朔の占いに関する信仰が伝えられ、それと並行して、養蚕に関する信仰として、蚕神の祭祀が伝えられたとしてもふしぎはない。また説話に言及するならば、天保十三年版の「東方朔秘傳置文」の序文に記されている、東方朔が農民のために、この予言の書を書残してくれたという話の如きは、東方朔の名を掲げた農耕に関する占いの書が伝えられておる限り、言わずもがなのことであるから、この書の伝承とともに東方朔の伝説が伝えられたことは当然考えられることである。とすれば、それと同じ関係において「蚕の由来」に関する伝説も伝えられてきたということは考えられることだろう。

いささか理屈を述べたが、先の「東方朔置文」の存在が、「おしら神」の祭文と中国古代の「蚕の由来」譚との関係を論ずる場合の傍証になるとするのは、このような提論の成立することを言ったものである。

以上論証の手順に則しつつ、あえて詳述したが、このようなところが、私の報告の前言の要旨であった。つづく本論では、現在までに調べあげた「東方朔置文」に関する調査結果を、中間報告として述べた。以上の趣旨からしても、私がこの学際的研究集会を発表の場として選んだことは説明を要しないであろう。この研究テーマが、内容的に、文学・宗教学・民俗学・社会学の諸分野にまたがる性質のものだからである。

「東方朔置文」は、十千十二支の組み合わせによって示される六十年間の一年毎に、その年間の農村生活にかかわる諸事象を予言した書物であり、花巻遠野界限の古い農家に写本によって伝えられているもので、その書物の普及に当っては、山伏の力が多くかかわっていたらしいこと、字を解さない農民は、祭などで野良仕事を休む折、この文書を持つ家に集まっては、その一年間に関する予言を読んで聞かせてもらうならわしを持っていたことなど、現地調査によって知られた限りのことを先ず報告し、写真資料によって、その写本の実態を示した。次に、これが明治四十二年、家庭百家の冒頭に加えられて「東方朔極秘傳帝國豊鑑」と題され、仙台市の書肆から活版印刷によって発行されたこと（ただし、予約会員間の限定出版）。また古くは、貞享三年に大阪で出された版本があり、「東方朔秘傳置文」と題されていたこと。また同題の版本が、天保十三年に江戸の書肆から出版されたことなどを、それぞれの序文のコピー資料によって紹介し、かつては、農村のみならず、都市の商家においても用いられたことがあったとい

うことをつけ加えた。

ついで、中国の昔の文書との関係に論及し、明の「夷門廣牘」や「五朝小説」の収める「探春歴記」が、やはり東方朔撰と称して、六十年間の予言を記していること。（ただし、この本の干支は、各年の立春の日の干支によって記されている。）また「東方朔置文」の予言の内容は、「開元占経」や「太平御覽」に見られる「東方朔占」の逸文の内容と性質を同じくするものであることなどを述べ、「東方朔置文」も、そのもとは、中国より伝来したものと考えられることを論じた。

以上の脈絡に沿って、東方朔の名を掲げる予言の書の、中国古代から日本近代への流伝を論じたわけだが、その論旨とは別に、これまでの「東方朔置文」のことに関する研究のありようを、前言の一部と、最後のまとめの部分で述べた。

その趣旨は、この文書は、これまで日本の図書と見なされ、日本史や社会学の学者の間では知られていたが、中国学の関係者には知られていなかったこと。また現在では、地元の教育委員会の調査員を中心に、熱心な地元民間の研究者によって調査が進められており、私の研究は、その成果を利用させていただいているに過ぎないということである。地元花巻市の研究者については、その中心的人物の実名を紹介した。

また報告に用いた資料中、「開元占経」中の「東方朔占」の逸文については、同会議に出席された関西大学の坂出教授よりお教えを賜っ

たことを、ここに附記しておく。

また、私の報告の際に *Discussant* に指名されたカリノフスキー氏（中国の占いに関する専門家）から、私の研究を進める上で有効な助言をいただいた。

発表に用いた私のフランス語は、習い始めて三年目という未熟なものであるのが少々心細かったが、この報告は、その内容にふさわしい学際的発表の場で行われたため、フランスの東洋学者の関心を集めることには成功したと思っている。

15.00 — Madame Caroline GYSS-VERMANDIE, Chercheur du

C.N.R.S.:

“Un exemple d'incorporation d'un culte local au canon rituel taoïste: les rites du Maréchal Guan dans le *Dao-fu hui-yuan*”

Discussants: Messieurs KYODO Jikō et TANAKA

Fumio

十五時 — カロリス・ジスリヴニルマンド夫人（国立学術研究セン

ター研究員）…

『道蔵』へ編入した地方祭祀の一例：『道法会元』における関元帥の儀礼（仏文）

対論者：京戸慈光、田中文雄

田中……この発表は、『道法会元』における関元帥の儀礼を通じて、

道蔵へ編入した地方祭祀の一例について考察を加えたものであった。

三國時代の歴史的人物の関羽は、民間においては関元帥として民衆に信仰されている。関元帥の儀礼は、十四世紀宋代の儀礼を中心としている『道法会元』（道蔵二二二〇）の巻二五九と二六〇に記載されている。この『道法会元』では、巻二五三～二五九の部分に地祇について、巻二六〇～二六八の部分に酆都について書かれている。

巻二五九は「地祇誠魔関元帥秘法」と題して、紫微大帝を関元帥の聖師としている。この巻は、ほとんどの部分が多くくの呪と符によって占められており、降神呪や偽のダラニ、気を引き入れてそれを身体内で煉る引気についての呪と、治病などの符がある。ここでの関羽は、魔除けと上帝の使者との二つの役割を持っている。この呪法は、一つの構成を持つものではなく、科儀が中心である。『道法会元』の中に収められているが、科でも儀でもなく、それよりむしろ悪魔払いや霊媒や煉度のタイプの儀礼である。この様な一連のものではない儀礼は、それぞれ独立したものであったのである。

一対の役割りの統率者、霊媒が特定の呪法を実行するのであるが、多数の要素が地祇法の祭典の中に含まれ、霊宝の祭式の伝統のものも含まれている。宋代には、地方信仰が道蔵に入ってくる様に、地祇法も公典儀礼に編入されるに至ってくる。地祇は巻二五三には「霊宝侍衛之官」として書かれている。

巻二五九の「誓刀現形符」には、符に合する号があり、人々は願いを拝表として、関元帥は願いを伝える使者となるのである。今日でも

醜では記録、奉獻拝表元帥による伝達が欠くべからざる三要素を構成している。地祇法の儀礼の次第は、靈宝の伝統と関係するのである。

地獄の伝統との関係は、卷二五九に関羽は酆都朗靈大将として、地獄の王とされている。これは紫微大帝のものではなく、三十代天師の虚靖天師に属する酆都法である。関元帥は地祇と酆都との中間にあり、関元帥は皇帝に見せてはならない儀礼を見せた為に、天師によって五百年間地獄に墮されていたのであり、これが酆都の伝統の始まりである。卷二六〇の酆都法も同様であり、八將軍の酆都法についても記されている。

「ジスウィエルマンド夫人は、この様な酆都法と地祇法の成立と法脈との歴史について、各種の文献を用いて、詳細に考証をしているが、それについては紙面の都合で省略したい。」

地祇法は簡単である為に人氣があるが、正統に伝わったものでない偽のものも多い。地祇は神に近いから、効力があるとされていた。地祇は儀礼の伝統や新しい宇宙論を持ってはいないが、偽似歴史的であり、像は特徴を持ち、地方神の性格を持っている。

関羽は地祇と酆都との二つの伝統の中間のものであり、地位は庶民信仰の力が強い為に、神とはならず元帥のままであった。一方、仏教の大元帥は一人であり、曠野神の阿吒薄俱 (Aṭavakha) が仏教に帰依した鬼神大将である。唐代の資料に基づき宋代に書かれた『仏祖統紀』によると、関羽を祭る教団は、彼の軍人時代の死場所が湖北の玉泉山であった為に、湖北から始ったものとしている。横死の者が、怪物や

鬼となり、死亡した場所で待っていて、祭られて神になるという事は、庶民の教団の形成の過程においては一般的におこなわれる事である。また、地方の鬼を宥める為に、その中の一つの強力な鬼を選び神とするという事もあったのである。地方の経済の発展によって、地方の信仰も拡がっていったとも考えられ、中央政府が地方の神を認め、名前をあげるといふ事は、その地方の豊かさに関係するのである。道教側の見方からすれば、庶民の祭る神は鬼であるが、天師が認める事により、正規の神となるのである。

以上がジスウィエルマンド夫人の発表の概要である。『道法全元』中の関元帥法を材料として、如何にして地方儀礼が公典儀礼に編入されたかを考証したものである。夫人の道教（正一派）儀礼に対する考え方は、儀礼は本来地方のものであったが、それが地方の発展にともない公典に入れられ、公式の儀礼となるプロセスを重視するものと感じられた。この様な考え方は、一人夫人ばかりではなく、道蔵研究全体の指導的立場におられるシッペル教授も持たれているようであるし、シンポジウムで「十世紀始めの四川省における地方祭祀の展開」を発表したヴェルエレン氏の意見の中にも感じとられた。この様な考え方は、ヨーロッパの儀礼研究の成果に基づいてなされたものであろうが、フランスの道蔵研究の一面を端的に表わすものといえよう。

16.00 Pause

16.30 Troisième séance



Président : Monsieur Léon VANDERMEERSCH

—Monsieur Hans-Hermann SCHMIDT, Chercheur de la

Deutsche Forschungs-gemeinschaft :

“'iao-chün's One hundred-eighty Prescriptions”

Discussant: Monsieur YAMADA Toshiaki

十六時 休憩

十六時半 (第三回) 議長：レオン・ヴァンデルメルシュ

—ハンス・ヘルマン・シュミット (ドイツ学術研究団体研究員) :

『老君百八十戒』について (英文)

対論者：山田利明

山田(利)……以下はシュミット氏発表の摘録である。「道箴」中には三つの「老君百八十戒」が収められている。一つは「太上老君経律」一つは「雲笈七籤」卷三九所収のもの、そしてもう一つは「要修科儀戒律鈔」に収められているものである。前記二者はほとんど同一の内容であるが、後者の内容は前二者に比べて比較的要約されたものとなっている。これらの戒は五つのカテゴリーに分けることができる。すなわち、(1)社会的な交渉に対する戒律、(2)政治習慣や社会習慣の拒否、(3)宗教的实践と内部の規律、(4)食規定、(5)今日的な要素を多分にもつた環境保護をテーマとしたもの。この(5)の中には、例えば山林田野を焼くことや樹木の伐採を禁ずること、などが含まれている。

さて、こうした内容をもつ「老君百八十戒」がいつ頃成立したか。

四〇〇年頃の古靈宝経である「太極真人敷靈宝齋戒儀諸経要訣」の中には、すでに「老君百八十戒」としてその名を見ることができ、これはこの戒律が三〇〇年代には存在していたことを証明するものであり、さらにもう一つの古靈宝経である「太上洞玄靈宝三元品戒功德輕重經」にも「三元品戒」という名のもとにこの戒律を見出すことができる。これら二つのテキストは異なった名称を用いているが、戒律の内容そのものは同じである。ただし、この靈宝戒律と正一戒律を比較すると、靈宝戒は厳密であり、したがってしばしばその規定の範囲をせばめるのに対して、正一戒はシンプルな形態である。第二の比較において、それぞれ異なったテーマが強調されていることは明白であるが、その一方、宝戒では先記した「政治的習慣や社会的習慣の拒否」に該当するものが少なく、正一戒はそれが靈宝戒の二倍になっている。同時に靈宝戒には「宗教的实践」に該当するものが、正一戒の二倍ある。およそ正一戒は靈宝戒より早く成立したと考えられるが、それはこうした戒律のもつ性格からも窺えるのである。

ここで老君戒のもつ一つの特徴的な事例を指摘したい。すなわち仏教信者のために書かれた鄒超の「奉法要」と共通する部分のあること、この中の五戒(不殺・不盜・不邪淫・真実語・不飲酒)が老君戒に見い出せることである。それらは五戒としてまとまって記されるのではなく、個々に点在するのではあるが、仏教戒・道教戒の形成を考える上で興味深い問題である。鄒超の親族が天師道の信者であったこ

とはよく知られている。したがって、郊超も何らかのかたちで「老君百八十戒」を知っていたものと想像されるが、これについては何の確証もない。

老君戒の影響は単に靈宝系のみではなく、他の教派にも及んだ。それは六朝期の經典である「上清洞真智慧觀身大戒文」と名づけられる經典からも明らかにされる。この經典はいわゆる「三百觀身大戒」が記されたもので、その三百戒は三つの部分に分けられる。第一の百八十四戒は正一戒とも密接な関係を有するもので、この中の七十七戒は正一系のテキストと全く同じものであり、九十六戒は靈宝系のテキストと同じである。第二・第三の部分は上清系の付加を考えねばならない。

これらの戒律は、十二世紀の中期に形成された全真教において用いられ、他の戒律とともに、道士の得度の際に重要な役割を演ずることになる。

17.30 —Madame Catherine DESPEUX, Maître-assistant à l'Université de Paris III: "Une interprétation taoïste de l'allégorie *chan* du dressage du buffle"

Discussant: Monsieur KYODO Jikō  
十七時半 —カトリヌ・デスプー夫人(パリ大学第三分校助教)...

『十牛図』の禅的寓意に関する道教的解釈(仏文)

対論者: 京戸慈光

京戸——十牛図(或いは牧牛図)と称されるものは、禅の修証の階程を描いたものとして、中国及び日本に於いて広く流布されたものである。しかし、その起源については、確実なことは知られていない。

この種の資料については、梶山雄一博士によって、ネパールの木版画の例が報告されているが(『仏教史学』7、牧牛図の西藏版に就て。『宗教研究』第一五四号、同題)、この他に、ラダックのスピトク・ゴンパ勤行堂(Spituk, (Tib.) dpe-thub dgon-po)と、リキール・ゴンパ勤行堂(Likir, (Tib.) khir-dkyil dgon-po)の二つの壁画が発見されている。これらのチベットに存在する「牧牛図」は、中国の「牧牛図」の起源について、示唆を与え、また中国の禅風と対蹠的なチベットの次第修習の禅を解説するものとして、重要な意味を持ったものであるため、参照しなければならない。

中国の牧牛図には、清居及び普明の黒白牧牛図と、廓庵の十牧牛との二種があるが、チベットの牧牛図は、その黒象漸白の過程が、各々の段階の構図に於いて普明牧牛図とよく一致する。ただし十二図という数は、清居に一致する。

チベット語の「glan-po」という語には、象と牛の義があることを考えると、これら両者が無関係であるとは思われない。チベット牧牛図は「止観」の「止」への階程としての「九心住」を中心とし、それに止の完成、観の完成、そして止観相連の三つを加えて、十二図を描くのであるが、それを象の調教に譬えることは、清弁の『中観心論』第三章十六偈、及び同趣意の蓮華戒の『修次中編』の一偈に基づくの

であり、『中辺分別論』、『莊嚴經論』、『音聞地』、『修次初編』等に詳しく説明されている。

チベットの牧象図に附せられた解説は、それらのインドの伝統的な教義と譬喩に基づいて牧象図が描かれたことを述べているが、中国のものについては、何故に牧牛図が描かれねばならなかったかについては、なにも述べられていない。

それらのチベットの牧象図の解説から想定すると、牧象または牧牛図の原本が、インド乃至チベットに存在し、それが現在のチベット牧象図の原本となったと共に、九〜十一世紀の間に、中国に入って、清居の牧牛図の原本となったが、中国においてはその原本が失われ、または道教などの中国的宗教に吸収されたために、本来のインドに起源した九心住と牧牛図の譬喩の思想も忘れられていったと考えられる。なお、この過程は儒教にもあてはまり、日本には『儒家十馬図』（清水春流）、『うしかひぐさ』（月波老人、湖南隠士観海画）などがある。

19. 00 Levée de séance

十九時 閉会

Mardi 8 octobre

09. 45 Première séance

Président: Monsieur YAMADA Toshaki

—Monsieur KANAOKA Shōkō, professeur à l'Université Tōyō:

“Zai Zhong-guo de pu-su zhi bian-yang — Mi-le he Bu-dai—”

(La transfiguration du bodhi-sattva en Chine: à propos de Ma-treya et de Bu-dai) (en chinois)

(en l'absence de Monsieur KANAOKA, souffrant, la communication a été admirablement présentée par Monsieur Jean-Noël ROBERT, Chercheur au C.N.R.S.)

◎ 十月八日(火)

九時四十五分(第一回) 議長: 山田利明

— 金岡照光(東洋大学教授) :

中国における菩薩の変様—弥勒と布袋—(在中国的菩薩之變様—弥勒和布袋—)(中文)

(金岡照光教授急病欠席のため、ジャン・ノエル・ロメール

氏が代読。中文を見事に仏文に翻訳)

11. 00 Pause

11. 30 —Monsieur Léon VANDERMEERSCH, Directeur d'études à l'École pratique des Hautes Etudes:

“Genèse et signification de la théorie des cinq-agents (*wu-zing*) dans le confucianisme ancien” (dans l'intérêt des auditeurs japonais, la communication a été présentée en anglais.)

Discussant: Monsieur SAKADE Yoshinobu

十一時 休憩

十一時半 —レオン・ヴァンデルメルシュ（国立高等研究院教授）…

古代儒教における五行思想の始源とその意味

（日本人参会者の為に発表は英文でなされた。原稿は仏文）

対論者・坂出祥伸

坂出——五行の観念は、古代中国、特に漢代の政治思想では、非常に重要な意味をもっていて、五行説は一般に、戦国時代の末ごろに、鄒衍によって完成されたといわれている。しかし、その起源は非常に早いと考えられる。恐らくは殷代にまでさかのぼると多くの学者たちが考えている。そして、五行の観念の原型について、多くの学者たちが、さまざまな方面から研究している。例えば、赤塚忠博士は、五方の観念から五行の観念に向ったのだと説いている。

Vandermeersch 先生は、▲尚書 ▼洪範の五事に着目されて、そこに記述されている聖・哲・文・謀・爾の徳性が、どのような文字学的意味をもっているかを研究された。先生は近年、甲骨文などの古文字に強い興味をよせていられるように思う。古文字資料を利用する場合には、二つの方法がある、と私は考える。

一つは、「文字学」で、もう一つは音韻学的方法である。

ところで、ヴァンデルメルシュ先生の五行の起源についての説明は、要旨第一頁の後半に見られるが、その説明に対して私は、いくつかの疑問と意見を提出した。

(一) 題目に、the ancient Confucianism とある。先生が五行説を、遠い殷代において発生したものとされるならば、元来、それは儒教

のものではなかったわけであり、また、いわゆる「五行家」の説でもない。その点について先生が同意されるならば、五行説が、いつ、どのように儒家にとり入れられるようになったのかの説明をしていただきたい。私の見解では、原始儒家において、五行説は、全く影響をもっていない。それは漢代以後の国教化された儒教にとり重要視された観念である。従って、the ancient Confucianism という題目の中のことばは不適當である。

(二) ▲尚書 ▼洪範の五事を、先生は特に重視されているが、この ▲洪範 という一篇は、その成立時期について大いに疑問がある。私の推測では、五行説が形成されて後に、原始儒家たちが創作したものであろう。だから「五行」の「五」という数字に合致するのである。先生の御説明では、（歴史的）順序が逆になっていると思う。

(三) 先生は、甲骨文などの古文字資料を利用されるが、多くの日本の学者は、古文字はもともと呪術的意味をもっていると考えている。例えば、「徳」という文字を、先生は、一を光線であると説明されているが（資料九）、一の意味は、目をつぎさす棒であり、「徳」の字は盲人になることを示しているのであり、それは、古代中国人の不具者 named (deformed) person に対する崇拜を示しているのではないのか。白川静や加藤常賢の説を参照されたい。

(四) 「万物一体」という場合の「物」を、先生は *physic* の意味にとりえられるが、そうではなくて、「生命を有する万物」の意味であり、生命をもたない *physical nature* は除かれる、というのが

私の意見である。つまり、生命を有する物は、「氣」を共有するから、一體なのである。そこで、△天人合一▽の觀念が成立する。しかし、この△合一▽とは、Unityであるよりも、むしろ感応 Cor-respondence である。

## 12.30 Déjeuner

### 14.00 Deuxième séance

Président : Madame Catherine DESPEUX

— Mademoiselle KAWASAKI Michiko : “Chūgoku senjūsu kyōten seiritsu katei ni tsuite no ichi-kōsatsu — *Butsu-mo-gyō to Maku-maya-gyō o chūshin-ni shite*—”

(Remarque sur le processus d'élaboration des sutras d'origine chinoise : à propos du *Fumu-jing* et du *Mōhe-moye-jing*) (en japonais)

Discussant : Monsieur FRANCIS VERELLEN

## 十二時半 昼食

### 十四時 (第二回) 議長：カトリヌ・デスプー夫人

— 川崎ミチコ嬢：

中国撰述經典成立過程についての一考察——『仏母經』と『摩訶摩耶經』を中心にして——(レジュメ仏文、発表日語)  
討論者：フランシス・ヴェルエレン

川崎発表要旨——中国撰述經典が成立していく過程に於いて如何なる

パターンが考えられるかを、仏母經と摩訶摩耶經を例にとって考えてみたものである。

擬疑經典、つまり非印度撰述經典、ここでいうところの中国撰述經典の成立に関して、大別すると次の三つのパターンが考えられる。

I 中国独自の思想・倫理觀念をその主題として、經典を製作したものである。

II 印度撰述經典から主題を採り、それを中国人に受容され易いように、中国思想・倫理孝觀念等を附加して、原型であるところの

印度撰述經典を変形させて成立したものである。

III IIのようにして作られたものの中から特定の部分(非印度撰述的記載の部分)だけを抽出、独立させて、それに経題を附したものである。

既に牧田諦亮先生が『疑經研究』の中で、疑經成立の六つのパターンを挙げておられるが、牧田先生が挙げられるのはその成立に対する外的要因であり、私が挙げたものはその成立に関する經典構成要素についてである。あえていうならば、擬疑經典成立に対する内的要因とすることが出来る。従って私の三つのパターンの第一番目については、牧田先生の前提書の中に詳しいので、それを省き、IIとIIIについて幾つかの気付いた点を報告した。

まず摩訶摩耶經という経名について、この經典が歴代経録中に於いて、真經と疑經のいずれにもその名をとどめている点に注目する。更に、同本異訳經典として「仏昇切利天為母説法經」と「仏説道神足無極变化經」があり、現在可見のそれらを比較するならば、これら二経

は、摩訶摩耶經の前半部分及び後半のある一部を除いた部分(後述②を除いた部分)とその主題を同じくしていることに着目する。

摩訶摩耶經は、積尊成道の後、生母摩耶への報恩の為に忉利天へ昇り、母に対して説法したという前半部分と、積尊入涅槃に関する後半部分の二つのテーマから成り立っている。尚且この後半部分を大別すると、

①巡遊入滅について——涅槃の予告と雙樹間に於ける入滅の記事は他の涅槃經典と同様である。

②積尊と生母摩耶との母子の情愛を描いた部分——この部分の記述は他の涅槃經典類にはなく、摩訶摩耶經独自のものである。また、特に注意を要する点は、この部分こそが、仏母經という名称で別に独立して存在している擬疑經典そのものであるということである。

③法滅についての記述——この部分についても、やはり他の涅槃經典類に存在する。

上記三区分の中の②に関して、印度撰述經典に附加されている要素としての中国的構成、表現、つまり非印度的構成表現をいくつか挙例し、摩訶摩耶經下巻の主題である仏入涅槃に対し、印度撰述經典に描かれている「仏入涅槃」の姿とは異なる、"印度撰述の仏入涅槃を中国的要素の附加によって変形(変質)させた"經典と考えられるとした。そして、仏母經に関しては、摩訶摩耶經下巻より独立した形で成立拡張された經典という理解を示し、擬疑經典として已に成立しているものの一部分が独立して、別の名称を得た擬疑經典として創出されると考えたのである。

——批評と今後の展望

牧田諦亮氏の『疑經研究』とは異なった見地からの成立についての分類ではあるが、その分類の根拠の一つとなるところの中国思想に関してより具体的に例証を挙げることが望ましい。

擬疑經典それぞれが如何なる儀式とかかわりをもって成立していったか、そして、民衆とのかかわり(社会とのかかわり)をも考えねばならない、等々の批評を発表に際して得た。今後はこれらの視点も踏まえつつ、更に、疑經類にみえる中国的要素の調査抽出分析並びに中国思想的意義の検討を続けたい。

15.00 — Monsieur Marc KALINOWSKI, Membre de l'Ecole

Française d'Extrême-Orient :

"La littérature divinatoire dans le *Dao-zang*" (Dans l'inté-

rêt des auditeurs japonais, la communication a été présentée en anglais.)

Discussants: Messieurs SAKADE Yoshinobu et FUKUI

Fuminasa

十五時

— マルク・カリノフスキ(フランス極東学院研究員) ..

『道藏』に見える占いの文献資料(日本人参会者の為に、発表は英文でなされた。原稿は仏文)

対論者: 坂出祥伸、福井文雅

坂出——卜辞の研究や周易の研究を除いて、占いにかんする研究は、

中国においても、欧米・日本においても、ほとんど行われていない。その理由は、(1)占いにかんする資料がほとんど残されていない。(2)次に、その資料がきわめて難解である、ことよっている。

カリノフスキ氏は、占卜の役割りを重要なものだと考えて、隋・蕭吉《五行大義》を研究しているが、今回は、《道藏》の中に、さまざまな占術書のあることを指摘した。私は、彼の占術研究に深い敬意を表したい。なぜならば、先ほど私は、占いに関する資料がほとんど残されていないと言ったが、それは、私が無知であり、また、固定観念に束縛されていたのであって、民衆生活の中で用いられている占いは、道教が成立して以後、道士たちに利用されるようになったために、現在では、《道藏》の中にさまざまな形で残されていたのである。カリノフスキ氏はこのような点に注意して、六朝時代から唐宋時代までの占術書をピックアップし、その具体的な方法がある程度まで明らかにした。非常にすばらしい研究である。

にもかかわらず、私は、いくつかの疑問をカリノフスキ氏の発表について提出した。

(1) 今日の《道藏》は、明代にできたものであるが、それ以前にも、道教経典の編集は、しばしば行われている。占術書は、いつから《道藏》の中に入れられるようになったのか。《雲笈七籤》の中にも、占術記事があるのか。

(2) 道教儀礼の中に占術記事が見出されることは、あなたの説明によってよく分った。しかし、その占術を実際に行なうのは、道士なの

か、それとも、術数者を特別に招いて占術を行なわせるのか。

(3) 択日という占いは、日本でも、今日でも實際生活の中で行われているので、非常に興味がある。しかし、日本の択日の實際のやり方を研究した人は誰もいない。どうか、あなたが理解できる範囲で説明してほしい。

(4) 御発表の第三グループ暦占の中の遁甲・六壬・太乙の三式は、その内容を見ると、例えば、病人の死生を知る法、猪の善悪を知る法などであり、これは、いわば雑占と称すべきものである。このような占法は、《大唐六典》によれば、朝廷の天文台に、それぞれの担当者が設置されて非常に重視されている。それでは、三式のどのような側面が天文台で重視されたのか。国家の運命にかかわる問題についても占うのか。

(5) 近年、式盤とよばれるものが、中国各地で出土しているが、その使用法はよく分っていない。出土しているのは、上記の三式のうち、どれに属するのか。そして、その使用法は分るのか。

(6) 御発表の中の(1)(2)のグループは、道教とは全く関係がないとあなたは説明しているが、それではなぜ、易占い、おみくじ占いなどが《道藏》の中に収められているのか。

福井——道士と術数者とが相互に依存し合ったり、むしろ屢々、両者が同一人であるとする発表者の説は、フランスでは必ずしも目新しい説ではないのではなからうか。私も同様の考えを持っているので

『道教』巻一、共著「道教とは何か」、他の方々の評価とは違つて、その説は当り前に思えた。

ところで、発表者は「仏教」という語を屢々用いているが、一口に「仏教」と言つても、その内容は様々である。ここで使つてゐる「七曜積災訣」や「秤星靈台秘要経」は、むしろバラモンとの関係で見ると、さうではないか。元来、仏教（特にインド原始仏教）と占の法に關係ないはずである。バラモンの占術が中国に入つてゐることは、『隋書』経籍志に記載がみえることによつて証明がなされた（この点の会報では記憶に頼つて論評したが、帰国後、確認できた）。

16.00 Pause

16.30 Troisième séance

Président: Monsieur SAKADE Yoshinobu

— Monsieur Francis VERELLEN, Doctant:

“The development of local cults in Szechuan at the beginning of the tenth century”

Discussants: Monsieur TAKAHASHI Minoru et Madame

Brigitte BERTHIER

十六時 休憩

十六時半 (第三回) 議長: 坂出祥伸

— フランシスタス・ヴェルヘルン (博士課程) :

十世紀始めの四川省における地方祭祀の展開 (英文)

対論者: 高橋稔、ブリジット・ベルチエ夫人

高橋——発表の趣旨は、唐王朝の衰亡とともに、唐王朝の治下にあつて禁止されていた四川地方本来の地方祭祀が次第に復活し、発展してゆくさまを、歴史事情に沿つて素直に論じたものだが、いさゝか個性に乏しい感じを受けた。

17.30 — Mademoiselle Christine MOLLER, Doctante:

“Les adeptes des Trois Grottes à l'aube de l'apocalypse d'après le *Dong-yuan shen-zhou jing*” (T' 335, fasc. 170-73)

Discussant: Monsieur Hans-Hermann SCHMIDT

十七時半 — クリスチヌ・ホルツバ嬢 (博士課程) :

『洞淵神呪経』(道藏一七〇—一七三番)の信徒像 (仏文)

対論者: ハンズ・ヘルマン・シュミット

19.00 Séance exceptionnelle:

Président: Monsieur Kristofer SCHIPPÉR:

— Monsieur LI Yuan-guo, de l'Académie des Sciences Sociales du Si-chuan:

“Le taoïsme au Si-chuan: histoire et situation actuelle”

(en chinois)

— Interprétation et explication additionnelle:

Monsieur Kristofer SCHIPPÉR

十九時 特別発表 議長: クリストフ・ア・シッパール



— 李遠國 (四川省社会科学院哲学所、助理研究員) ..

四川省の道教・歴史と現状 (中文)

通訳と追加説明・クリストファ・シッペール

20.00 *Levée de séance* 二〇時 閉会

Mercredi 9 octobre

9.30—19.00 *Excursion pour Rouen en autocar*

◎ 十月九日 (水)

九時半—十九時 ルーアン市見学 バス旅行

Jedi 10 octobre

9.45 *Première séance*

Présidente: Madame Isabelle ROBINET

— Monsieur SAKADE Yoshinobu:

“The Taoist character of the ‘Chapter on nourishing life’ of the *Ishingo*”

Discussants: Madame Catherine DESPEUX et Monsieur

Marc KALINOWSKI

◎ 十月十日 (木)

九時四五分 (第一回) 議長: イザベル・ロビネ夫人

— 坂出祥伸: 『医心方』養生篇の道教的性格 (英文)

対論者: カトリヌ・デスブー夫人、マルク・カリノフスキ

坂出発表要旨——養生術は、中国古代において、神仙家の術として発達したが、その後、道家思想や医術の中にとりいれられた。魏晉時代になり、宗教組織としての道教が成立すると、神仙思想が、その重要な要素となったので、養生術は、いっそう広く研究されるようになった。つまり、従来の呼吸法 (行気 *xingqi*) や健康体操 (導引 *Daoyin*) のほかに、不老長生をより確実なものにするために、薬学・化学・医学などの分野で、多くの実験が行なわれ、多くの経験的知識が収集された。そして、隋唐時代になると、道教の医薬学は発展の頂上に達し、いくつかのすぐれた成果をうんだ。

日本の平安時代 (七九四—一一八五) には、このような大陸医薬学が輸入されたのであるから、当時の支配者が道教を嫌っていたにもかかわらず、大陸医薬学に色濃くまじった道教的要素は、しだいに日本文化の中に深く浸透していった。私は、日本の古代医学を代表する丹波康頼 (Tanba-no Yasuyori. 912-995) 編『医心方』三〇卷 (九八四) をとりあげ、特に、その中の卷二七〇「養生篇」について、以下のことを検討した。

(i) この篇で説かれている養生術が道教的性格を非常に強く示している。例えば、体内神を存思する方法を説いている。

(ii) この篇に引用されている医薬書その他の中国書籍がすべて、道教に深く関係したものである。

(iii) 平安時代の日本の医薬学は、隋唐時代の大陸医薬学を輸入し、模倣したものであったから、当然、それは道教的性格を濃く含んでお

り、特に、そのうちの養生術は、貴族たちに広く長く愛好されていた。

対論者カトリヌ・デスブー夫人の質問——

『医心方』に引用されている中国の医学文献は、もとの文がそのままの姿で引用されているとは限らないと思うが、どうか。

答。その通りである。

『養生要集』とは、どのようなものか。

答。東晋の張湛の著述であり、これについては、別に論文を用意している。フルベーパーの注(ii)を見られたい。明年春発表する。

対論者マルク・カリノフスキ氏の意見——

道教と医学との区別あるいは関連が、今すこし明らかでない。

そのほか、オブザーバー出席者である日本学研究者フランシス・ニライユ女史(パリ大学教授)から、大江匡衡が『養生抄』(深根輔仁)を読んだという記事を何かで見たことがある、との御教示をいただいた。フランスの日本学者の水準の高さを知った。

11.00 Pause

11.30 Séance exceptionnelle :

—Projection du film vidéo d'un rituel taoïste, *Qian jiao*,  
réalisé par Patrice FAVA

Explication en anglais et en français : Monsieur Kristofer

SCHIPPER

12:30 Déjeuner

十一時 休憩

十一時半 特別発表：パトリヌ・ファヴァ製作ビデオ

道教儀礼(台湾)『祈安醮』の映写

英・仏語による解説：クリストファ・シッペール

十二時半 昼食

14.00 Deuxième séance

Président: Monsieur TAKAHASHI Minoru (en français  
et en chinois)

—Monsieur YAMADA Toshaki:

“One phase of the belief in ‘the Map of the true form  
of the Five Mountains (*Wu-yüeh chen-sing tu*)’ in the  
Edo period (1603-1867)”

Discussant: Madame Isabelle ROBINET

十四時 (第二回)議長：高橋稔(仏文と中文とで司会)

—山田利明:

江戸時代の『五岳真形図』信仰の側面(英文)

対論者：イザベル・ロビネ夫人

山田発表要旨——江戸時代の「五岳真形図」の信仰を考えると、二つの基本的な資料に留意しなければならない。一は平田篤胤の「五岳真形図説」(文政十年＝一八二七)であり、一は大江匡衡の「五岳真形図伝」(安永四年＝一七七五)である。この二書は江戸時代中期か

ら後期に書かれた「五岳真形図」の効用や儀礼をまとめたものであるが、内容的には室町時代以降の「五岳真形図」信仰の実態を伝えるものと考えられる。

ところで、「五岳真形図」には、かつて井上以智為博士が指摘されたように、古い形態をもつ五岳図と、宋代以降一般化され現在われわれが目にする新しいタイプのそれと、二様の五岳図がある。上記二書は、共に宋代以降の新しい五岳図を掲載しており、その点からも宋代以後の中国から伝えられた「五岳真形図」の信仰を基盤にしたものといえる。しかし、唐代以前に用いられていた五岳図、それは宋代以降のものとは全く形態を異にするものであるが、これもまた八〇〇年代の日本に確実に伝わっていた。藤原佐世の「日本国見在書目録」五行家に、「瑞応図十五、岳図一、符瑞図十」とあるのがそれで、この場合の「岳図」一巻を井上博士は「五岳図」一巻と考えられた。確かに「宋史」芸文志には「瑞応図十巻」と記されているので「日本国見在書目録」は「瑞応図十、五岳図一」と訓むべきであって、井上博士の推定は妥当と考えるべきである。この平安時代以来の「五岳図」、すなわち古五岳真形図とでも称すべきものも、江戸時代には存在した。ただしそれは、平田篤胤によれば、信仰の対象としてではなく古玩の対象としてであり、その祭式等も忘れられていたという。

平田篤胤の「五岳真形図説」、大江匡弼の「五岳真形図伝」に記された五岳図の祭式は、「雲笈七籤」巻七九の「五岳真形法」あるいは「伝授三洞経戒法録略説」などの道蔵文献と基本的には同様の形式を

踏むものである。しかしながら細部にはかなり日本化された儀礼を記しており、例えば五岳図礼拝に際しての五拍手や、陰陽道か修験道の影響を受けたと思われる祭文などが散見できる。またその効用は、単なる招福攘災にとどまらず、概して具体的であり、武士、農民、商人芸人等で、この五岳図を祀ればどのような利益を得られるかをそれぞれについて記す。

ではこのような五岳図の信仰がいつ頃から行われるようになったのであろうか。平田篤胤は、「五岳真形図説」中に秘本「正一人伝」なる一書を引いて五岳図の効用を説くのである。篤胤によれば、この秘本は推古天皇の十九年（六一一）、百済の聖明王の第三子琳聖太子の將來という。しかしながらこの秘本に記された五岳図と五岳真君の名は、いわゆる新しいタイプの五岳図と宋の真宗によって封ぜられた五岳真君名であり、明らかに宋代以後、明の洪武帝による真君名の廃号までの時期に將來されたことを示す。すなわち平安末から室町時代頃までに伝えられた五岳図と五岳真君の信仰を基礎にしているわけである。

「五岳真形図」信仰の流布には、各地を行脚する修験道の行者が深く関わっていたようである。ただその初期、「日本国見在書目録」に記された時点では、「五行家」の部に入れられていることから知られるように、陰陽道の中で使用されていたものであろう。

15.00 — Monsieur Kristofer SCHIPPER, Directeur d'Etudes à l'École pratique des Hautes Etudes :

“Ti-shen xiao-kao” (Le rituel du ‘corps de remplacement’  
en Chine) (en chinois)

Discussant: Monsieur FUKUI Fumimasa

十五時 — クリストファ・シッペール (フランス国立高等研究院教

授) ..

中国における「身代わり」(替身)の儀礼について(中文)  
討論者: 福井文雅

福井——発表者シッペール氏は、終始中国語で論述した。このような  
違例のハッピングは、国際会議ではよく起る。司会者は、公用語を  
使うように氏に注意し、私は、対論の始まりには、シッペールの題目  
の一部「替身」を使って、「ここにいる中国人の李遠国先生が私の身  
に替って対論して下さると宜しいのだがそうも行くまいし、他の聴衆  
の都合も考えて」というようなことを中国語で先ず言ってから、公用  
語のフランス語に切り換えて話を続けたのである。

シッペール氏は、台湾で現在も行なわれる「小法事」の一つの替身  
或は代人と呼ばれる身代りの儀礼を詳述し、日本にも同様の儀礼があ  
るかどうかを最後に尋ねている。それは丁度、鳥取県の流し雛の行事  
と酷似している。早速、鳥取の実際を説明した(私の実妹が鳥取  
に住んだことがあり、電話での私の問い合わせに対して、実際を話し  
てくれたのである)。

ところで、この「替身」を道教起源と見なし得るであらうか? シ  
ッペール自身も認めるところに『道蔵』には、これと同じ儀礼は見えな

い。しかし、似た例は在る、とシッペール氏は言うのである。しかし  
そうなるか、拡張解釈になりはしまいか? 自分の罪過、けがれを他  
へ移す行為であれば、古く『史記』封禅書の中に、帝王が臣下に罪を  
転嫁する例が想い出される。このような研究では、先ず替身という言  
葉そのものの初例の時代設定が必要で、それが無ければ、似た事例で  
あれば世界中どこにでも在ることになる。そうなるか、この発表の  
目的、学問的意義はどういうことになるのであらうか?

16.00 Pause

16.30 Troisième séance

Président: Monsieur Kristofer SCHIPPER

— Madame Brigitte BERTHIER, Chargée de cours à l’Uni-  
versité de Paris X:

“Le culte de la Dame de l’Eau; lignée taoïste du Fu-jian”

Discussant: Monsieur Franciscus VERELLEN

十六時 休憩

十六時半 (第三回) 議長: クリストファ・シッペール

—ブリジット・ベルチエ夫人(パリ大学第十分校非常勤講  
師) ..

臨水夫人の祭祀: 福建省の道教一派の例(仏文)

討論者: フランシスクス・ヴェルエレン

17.30 — Monsieur KYODO Jikô:

“Recherches japonaises récentes sur le taoïsme”

—Monsieur FUKUI Fuminasa :

“Remarques additionnelles—Activités de la Société japonaise des Etudes du Taoïsme” (en français)

十七時半 —京戸慈光 :

日本の道教研究の近況 (仏文)

—福井文雅 :

補説 —日本道教学会の現状 (付—来たる第三十六回大会、特にそのシンポジウムの紹介) (仏文)

京戸——一九八二年の前のシンポジウムにも、私はオブザーバー兼通訳として参加したが、今回のシンポジウムで、一段と多くの成果を得た。それはフランスの道教研究の方法及び道教資料の分類方法などである。一方、今回日本側からも、さまざまな専門の立場からの発表があった。そして、それを裏づける日本の道教研究が紹介された。最後の日に発表することになった私の役目は、日本の道教研究の近況(一八六八—一九八四年)、つまり日本の道教研究文献目録を作製し、その研究領域の分類及び紹介することにあつた。まず、(1)日本の道教研究の特色を述べ、さらに欧米の道教研究と比較し、(2)フランスの道教研究とどこが違うか弁別し、また共通点はどこかを検討し、その上(3)どの研究分野が未開拓かを取り出し、問題提起した。

- (1)日本の道教研究の近況——これについては、すでに ①妻木直良「日本に於ける道教の研究」(竜谷学報、三〇六・三〇八、一九三三—三四年)、②酒井忠夫「道教研究の動向」(東方宗教一、一九五一年)

③酒井忠夫・野口鐵郎「中国宗教史研究の発展」(歴史教育九一九、一九六一年)、「阿部肇」(戦後日本における中国仏教・道教史学)(史潮七八・七九合併号、一九六二年)、④酒井忠夫「日本における道教研究」(酒井忠夫編『道教の総合的研究』、国書刊行会、一九七七年) ⑤Tadao SAKAI and Tetsuro NOGUCHI, 『Taoist Studies in Japan』、⑥Holmes WELCH and Anna SEIDEL, ed., 『Facets of Taoism. Essays in Chinese Religion』(Yale Univ. Press, 1979) などがあり参照されたい。最近では、『道教』第三卷(平河出版、一九八三年)の「道教研究文献目録」(pp. 387~486)があり、これに『講座敦煌4、敦煌と中国道教』(大東出版、昭和五八年)、『雑誌記事索引』(国会図書館)、『東洋学論文目録』(京大人文研)、『東洋学関係論文目録』(東方学会)、『中国思想宗教文化関係論文目録』(中国思想宗教史研究会編、国書刊行会、一九七六年)、『XXX International Congress of Human sciences in Asia and North Africa』報告書二卷(1984)などによって補って今回「道教研究文献目録」(五〇頁)を作った。これにあたって、研究文献を分類したのが次の表で、日本の研究論文と欧米のそれとの数と比率を記した。

I 道教そのものに関する研究

(1)道教の概説

①全般にわたるもの	122 (65.6%)	64 (34.4%)
②道教とは何か	14 (46.7%)	16 (53.3%)

△日本▽ 〓欧米▽

(2) 道教の歴史	320 (94.4%)	19 (5.6%)
(3) 道教の経典	245 (90 %)	27 (10 %)
(4) 道教の神々	309 (94.2%)	19 (5.8%)
(5) 道教の儀礼	240 (84.8%)	43 (15.2%)
(6) 道教の教義と実践 (養生術・錬金術・神仙道)	163 (85.8%)	27 (14.2%)

## II 道教の周辺に関する研究

### (1) 道教と諸思想

① 道教と老荘思想	272 (87.2%)	40 (12.8%)
② 道教と儒教	145 (100 %)	0 (0 %)
③ 道教と仏教	157 (88.7%)	20 (11.3%)

### (2) 道教と諸信仰

① 民衆道教	42 (87.5%)	6 (12.5%)
② 道教と社神	21 (80 %)	14 (40 %)
③ 道教と宗教結社	260 (95.6%)	12 (4.4%)

### (3) 道教と諸文化・科学

① 道教と諸科学 (科学思想・技術・天文学)	63 (92.6%)	5 (7.4%)
② 道教と医学・薬学 (養生術・導引術・本草学)	163 (98.2%)	3 (1.8%)
③ 道教と芸術	54 (65.9%)	28 (34.1%)
④ 道教と文学		
⑤ 道教と年中行事		

## III 道教の伝播に関する研究

(1) 日本の道教	160 (100 %)	0 (0 %)
(2) 韓国の道教	117 (100 %)	0 (0 %)
(3) 敦煌の道教	57 (100 %)	0 (0 %)
(4) 台湾の道教	61	
(5) 香港・マレーシアの道教・その他 (東南アジア等)	12	

## IV 道教の研究

(1) 海外の道教研究	31	16
(2) 日本の道教研究	52	

### (2) フランスの道教研究の特色

右の道教研究文献目録の中から、最近の主な研究の紹介をし、日本の道教研究の傾向を述べ (仏文三三頁)、その上で欧米の道教研究、とくにフランスの道教研究とどこが違うかを弁別、すなわちフランスの道教研究の特色に触れてみた。

今回、私がシンポジウムに参加した目的の一つは、そこにあった。つまりフランスの道教研究の「方法」の探求にあった。日本では、特に東洋学や道教、仏教学の思想的研究で、方法はあまり問題にされて来なかったようである。あっても初歩的な知識の供給や、手引・入門書などであり、おおむね技術的な面が中心であった。

方法には、技術的な意味 (テキスト・クリティックなど) と、その技術の使い方を決める根本的な態度、物の考え方 (どういう考え方で

その選択の基準を決めるか)という二つの意味がある。フランスで言う場合の「方法」とは、後者を指すもので、方法論の中心はそこにある。テキスト・クリティックや資料集めに特に大きな相違はない。経験的技術や文献的知識は時がたてば増えてくるし、コンピュータや他人でも代行させられる。しかし、いかに努力して資料が豊かになっても、解釈する態度や、物の見方が誤り、資料の操作を誤れば、その結論は無意味となる。今回の発表において、ハンズヘルマン・シュミットの『老君百八十戒』について、ヤマルク・カリノフスキの『道蔵』に見える占いの文献資料、カトリヌ・デスブー夫人の『十牛図』の禅的寓意についての道教的解釈<sup>1)</sup>などは、資料を解釈する態度が明確に示された例であろう。

とくに道教が日本の場合と比較して、フランスで関心をもつのは、世界の宗教史から見れば、道教こそが中国の固有の宗教であり、様々な興味ある現象を含んだ研究対象であり、中国の隣接諸国の宗教の中にもその要素が見られるので(Ⅲ道教の伝播に関する研究)、宗教学として面白い題材なのである。『老子』『莊子』は哲学書として評価があり、「易」とか「周礼」などの神秘性や宗教現象を含む經典は、宗教研究の為のデータとして使われるが、儒教はほとんど興味の対象にならず、儒教成立史などと言う学問は生まれてこない(Ⅱ(1)③道教と儒教 参照)。それは内容が欧米にも在る倫理に過ぎないからである。また道教(や仏教)などは、世界の宗教の一分子として、その中で比較しつつ研究しようとするのであるから、他の分野の学者との交流

が活発であり、東洋学の各分野は勿論のこと、人類学者や民俗学者との共同研究も盛んである(例えば、ブリジット・ベルチエ夫人の『臨水夫人の祭祀——福建省の道教一派の例——』<sup>2)</sup>などの発表)。こうして広い視野から道教を把握しようとしている。

現在、フランスの中国学者・道教学者の多くが、まず古典や哲学、法学などの勉強の後に、それらの教養を使って中国研究や、道教学研究の体系化を計ろうとしているのである(『中外日報』フランス通信、東洋学、仏教学の歴史的展望、一九八六年二月七日等参照)。

次に、フランスの道教学研究の方法について、具体的にその特色を二、二述べてみたい。

第一は、フランスの道教学研究は……いや研究全体にわたる事であるが、——「定義」から始まると言ってよい程、定義を重要とする。前述の研究文献目録の「Ⅰ(1)②道教とは何か」の項の欧米論文の数は、日本のそれより上まわっていることから解る。今回の発表の中でも、レオン・ヴァンデルメルシュの『古代儒教における五行思想の起源と意味』や、イザベル・ロビネ夫人の『道教における「性」概念と儒教の「性」概念との関係』などは、定義から始まり、他の事項と比較して概念を位置づけている。日本の研究論文の大半が、何を言わんとしているか判らない、事実の並列と叙述であって論理的明晰性を欠く、という批判は外国の学者達から聞くことであるが、定義しかねる存在などと言うものは、研究者の思考の不明晰性を示すものである。

この定義と裏表の関係にあるのが、フランスの研究方法の特色の

「比較」がある。それは、デュルケームや、宗教学者バスタード、中国古代宗教研究のグラネなどの伝統を受けついでいるものである。

さらに、この定義と比較によって研究が積み重ねられた後に要求されるのが、論理的体系化である。資料を分析し、それを総合して行く態度は、これもまた古くデカルトの説くところであるが、その結果の体系化とは、いわば一つの研究主題を核に、周辺をかためて論理的に一つの研究を構成することである。今回の発表で、クリストフマ・シッペールは「替身小考」でそれを示してくれた。

19.00 Allocutions de levée de séance :

— Monsieur SAKADE Yoshinobu (en japonais)

— Monsieur Kristofer SCHIPPER, Directeur d'Etudes à l'École pratique des Hautes Etudes (en anglais et en français)

十九時 閉会—閉会の辞

日本側：坂出祥伸 (日文)

挨拶要旨——今回の日本人参加者は、日本の道教研究者の中では、比較的若い世代に属している。この会議でフランスの関心と研究法を知り、研究者や李遠国氏と面識を得たことは幸いであり、今後の交流を希望する。シッペール氏を中心とするフランス側の努力と、特にロムール氏の通訳、また、コロージュ・ド・フランス関係者の配慮へ謝意を表明。

フランス側：クリストフマ・シッペール (フランス国立高等研究院教授)

(オブザーバーも含めて、日本人一人一人に対して丁寧な謝辞) (英文・仏文)

Vendredi 11 octobre

10.00 Visite à l'exposition d'art religieux japonais (Annexe du Musée Guimet, 19, avenue d'Iéna, Paris 16<sup>e</sup>). L'exposition a été présentée, en français et en japonais, par Monsieur Bernard FRANK, Professeur au Collège de France, membre de l'Institut.

◎ 十月十一日 (金)

十時 ギメ美術館別館展示の「日本の宗教美術コレクション」を見学。スルナール・フランク氏 (コロージュ・ド・フランス教授、日本学。フランス学士院・日本学士院客員会員) から、歓迎の挨拶と懇切な解説 (仏文・日文) がなされた。

12.00 Discours de remerciement pour les aides apportées par le Ministère des Relations Extérieures, le Collège de France, l'équipe du Projet *Tao-tsang* de Professeur Schipper (Fondation Européenne de la Science) et tous ceux qui ont travaillé pour la réalisation du Colloque, suivi des félicitations pour Professeur FRANK, lauréat du Prix Japan



Foundation : Monsieur FUKUI Fumimasa (en français)

Discours de clôture du Colloque : Monsieur Kristofer SCHIPPER (en français)

十二時

それに対して、日本側から、フランス外務省やコレージュ・ド・フランス、欧米『道蔵』研究プロジェクト班（シッペール教授主宰）などの関係者各位から寄せられた援助への謝意と、フランク教授の国際交流基金受賞への祝意とを含めた最終の挨拶（福井 文雅教授）（仏文）。フランス側から、これで東洋学部門の全日程が終了した旨の挨拶と、関係者全員への謝辞（クリストフマ・シッペール教授）（仏文）。

14.00 Visite au Centre de documentation et d'études du taoïsme

(aux Instituts d'Asie du Collège de France, 22, avenue du Président-Wilson, Paris 16<sup>e</sup>).

Présentation de la banque de données sur l'histoire du taoïsme du Projet *Tao-tsang* par Mesdames Irène SCHAEFFER, Collaboratrice technique du C.N.R.S. et Caroline GYSS-VERMANDE (en français)

十四時

ギメ博物館に近いアジア研究所内に置かれている「道教資料・研究センター」を見学。欧米『道蔵』研究プロジェクト班による『道蔵』のデータ・バンク入力の実情について、

イレニス・シニッフニル夫人（国立学術研究センター技術

協力者）と、カロリス・ジスリヴニルマンド夫人とが、詳細にデモンストレーション（仏文）。

これについては、山田利明氏の後文40頁を参照。

18.00 Réception offerte par Monsieur Alain HOREAU, membre de l'Institut, Président de la Fondation Ilugot du Collège de France. Tous les orientalistes français y étaient invités.

十八時

ユーゴー会館（コレージュ・ド・フランス付属施設）館長アラン・オロー氏（フランス学士院会員）主催による東洋学部門の閉会カクテル・パーティー。

会場：ユーゴー会館 地下一階。

フランスの東洋学者、夫人同伴で一堂に会す。

ただし、公式挨拶はそれまでに既に全て終わっているのです。このような大パーティーの例として、挨拶類は一切無し。

二〇時

フランス側協力者数人を、シャンゼリゼ大通り横の日本レストラン「MIKI」に招待し、打上げ会。

◎ 十月十二日（土）昼 全員解散、帰国

日本側参加者の感想

福井文雅——私もこれまで数多く国際会議に出席してきたが、私個人にとつては、今回ほどリラックスして、居心地の良い会はなかったように思う。昔留学していた当時の同窓生や先輩が主催者になっていた

ということばかりが理由ではない。日本人同士の間でさえ、（これは私だけの思いこみかもしれないが）遠慮なくお互いに言い合え、学問以外のことに余計な神経を余り使わずにすんだことが、終了後の充足感につながったのであろう。（会議の内容については既に述べた。）

会議室の隣りの簡単なキッチンで用意されたのにも拘わらず、毎日の昼食が実に美味であり、サービスも満点であったことも、*joie de vivre* を与えてくれたのであろう。

終りのレセプションには、なんと！かの「ルノートル」Lenôtre菓子店から酒の肴の出前が来た。しかも、フランス東洋学のお偉方は続々やってきたのに、公式の挨拶は一切無し。フランスでの最高の立食パーティはかくあるのが正式なのだそうである。

川崎ミチコ——○道蔵プロジェクト

「道蔵プロジェクト」の活動に関しては山田利明氏が後文で詳細に報告されているので、ここでは一、二感じたことを述べることにする。

ぼう大な道蔵本をその固有名詞の分類（姓名・号・官職・年号……等々）によりカードを作成し、それをコンピュータに入力し、索引をプリントアウトしていく、その気の遠くなるような作業を黙々と進行させているプロジェクトメンバーに対して驚嘆並びに羨望を禁じ得ないのである。また、この作業の全ての事柄に対して唯一無二のチェックをされているシベール教授に対し畏敬の念さえ感ずるのである。しかし、人間の力にはおのずから限界があり、また、多数の人間が分

担作業によって道蔵本を読んでいくということからしても、ある程度のミスが生ずるのは止むを得ないことであらう。漢文の読み方、つまり句読の打ち方等に対する主観の違いもあるかと思うと、チェックをする段階での責任の重さ、大きさが問題になると考える。今後、我々も出来る限りの協力が可能となるよう連絡を密にする必要があるであらう。

○ギメ博物館

十月十二日午前、ギメ博物館別館に於いて、日本仏教全般に関わる仏像仏画及び神道に関する展示物の参看が行なわれた。この折、アジア研究所日本部門の責任者でいらっしやるベルナル・フランク先生による微に入り細を穿った解説がなされた。陳列されているものはギメが日本で収集したコレクションのほんの一部分であるとのことであったが、いずれも貴重な美術品であり、現在日本にあってもなかなか目にする事の出来ないものも多かったのである。他にフランク先生が日本で入手されたものも陳列されており、いずれも日本仏教に関する（諸々の宗派全てにわたって）ものとしてはきわめて稀貴なものばかりである。特に私の興味を引いたものは、大黒天に関するものであり、また驚嘆に値いするものとしては、ギメが収集したものに関して、時を移さずして目録が作られていたことであった。日本仏教諸宗派にそれぞれ関わる仏像仏画等が一堂に会しており、日本に於いては決して一ヶ処では見る事の出来ないであろうそれらの陳列品を、丁寧な解説のもとに看得たことは何よりであった。

坂出祥伸……今回の日仏学術シンポジウムに出席するには、わりと氣楽だった。というのは、まず、ことばの面で、フランス語の達者な福井文雅教授、それにアメリカ留学経験のある若い方々と同行できるという点で、いくらか安心感があつたこと、次に、パリには、シッペール教授、ヴァンデルメルシュ教授のほかに、旧知のカリノフスキ氏、モリエ嬢がいて、二人ともシンポジウムに参加されると分つていたので、もう一つは、共通テーマが「道教と日本文化」となっているもの、私じしんの発表は、「医心方養生篇の道教的性格」という題から分るように、日本医学史という非常に特殊な分野であつて、たぶんフランスの道教研究者の博識をもつても、この分野にまでは及んでいないだろう、という予測があつた。そしてまた、近年、『医心方』を道教研究の資料としてひもとく機会がしばしばあつて、そのうちに、このテーマをとりあげようという心積りで、何年か資料を集めていたので、テーマそのものに、いくらか自信があつた。

とはいふものの、このシンポジウムというのが、日本で一般にシンポジウムと銘打って行われているものとは、どだい違つていて、そのしんどさだけには、実のところ参つてしまった。その第一は、自分の発表とそれについての質疑応答だけが責任範囲というのではなくて、ディスカッサント(対論者)として私に割当てられた論文二篇を読み、その要旨をつかんで、質問ないし問題提起を行なうことが課せられるからである。この責務を果すことが何よりも苦しかった。二篇とも出版前にレジュメが渡されていたのだが、そのうちカリノフスキ氏のは、

二二頁もの長文。しかも、フルペーパーは、パリに到着した翌日の九月三十日、フランス側参加者との顔合せの時に成つて、はじめて渡された。だから十月七日のシンポジウム第一日までの間に、二篇のフルペーパーを読まねばならない。カリノフスキ氏のそれは、受取つてびっくり、タイプ用紙にダブルスペースでプリントして、三十六頁にもなる部厚いものだ。私には、ほとんど辞書なしには読めないフランス語なのに、三十六頁もの長篇を一週間で読んで質問せよとは、どだい無理な話だ。知っている単語と引用されている漢文資料とから、内容のおよそを推測するしかない。もっとも、カリノフスキ氏がそんな私に同情して、彼の発表の前日七日の夜、一時間ほど時間を割いてくれて、自分のペーパーの要点を日本語で説明してくれたから、大いに助かった。一方、ヴァンデルメルシュ教授の発表は、英語で書かれ、しかも実に短いもので、これは容易に理解できた。

もう一つのしんどさは、シンポジウムそのものが朝九時四十五分に開始されて、昼食休憩やコーヒープレイクをはさむものの、夜の七時近くまで続けられるというハードスケジュールが続くことによる。狭い一室に閉じこめられて、参加者が円形に並んで坐つており、しかもビデオカメラが私たちを撮影しているのだから、居眠りもできない。こんなに厳しく疲れた学会は初めてだった。

#### 全体的な感想

フランス側の発表を聞いていて、個々の研究者は非常にすぐれた資質を備えており、鋭い問題提起を行なつていて、この国の中国学、と

くに道教研究は、明るい未来があると感した。若い研究者が、これほどに育てられているのか、と思った。ただ、残念に思うのは、長く中国学の研究に従事している人についてさえ、中国についての知識の幅がやや狭いのではないのか、という疑念を抱いた。例えば、経学について、朱子学について、また、官制についての基礎的な知識が不足しているのではないのか、という疑いが残る。もしそうであるならば、そのような欠点をどう克服するのか。その原因が、もし、セクト的な研究方法にあるとしたら、研究方法の組織化、共同化という方向がとれないものか。歴史・文学・哲学・科学史などの中国学の諸分野の研究者が一堂に会して、ある一つの共通テーマを持統的に共同で研究するという方法は、中国学の研究者の知識と視野を拡大するのに非常に有効であり、また刺激的でもある。中国学研究もすでに、個々人が勝手気ままに、いわば職人芸的に自分の研究室にとじこもって行うといったマニユファクチャー的段階をこえていかねばならなくなってきた。いるし、ぜひ、そうであってほしいと期待している。このような問題は、実は日本の中国学研究の現状についても、かなりの程度あてはまるのではあるが。

田中文雄——今回のシンポジウム・オブザーバー参加について、福井・山田(利)両先生から御連絡を頂いたのは、昨年冬に留学先の米国カリフォルニア大学バークレー校であった。シンポジウム開催については、以前から本学会の『学会通信』等で知っていたが、一九八四年八

月より一年カリフォルニア大学へ客員研究員として留学する事が決っており、そこで中国仏教を研究せよと米国文部省から課題を命ぜられていた為、発表用意の面からも参加は無理と思っていた。しかし、両先生からの便りで発表以外にもオブザーバー参加がある事を知り、更に当時指導を受けていたストリックマン Strickmann 先生の勧めもあり、参加する事を決定したのであった。

道教の知識に乏しく、日本文化の研究に何のバックグラウンドも持っていない者が参加して、どれほど理解出来るかとの危惧、もっと本音をいえば、他の参加者の足手まといになるのではと心配していたが大いに刺激を受けて帰国する事が出来た。それは碩学の意見を拝聴出来た事と、若い研究者が何をどの様に研究しているかを知り得たからである。

フランス側の若手研究者の研究、特に儀礼研究については、他に報告があると思うので、彼等の仏教理解について少し感想を書きたい。欧米の学者の研究について、一つの研究テーマや文献には専門的であるが、他の分野の知識に乏しいとの批判をよく聞く。これは欧米の研究状況の一面についての見解としてはある意味で正鵠を得ている。欧米では、日本の様に中等教育の段階から中国文化の一端を学び始めるのではなく、また地理的隔りによる習俗・慣習の大きな違いがある為、当然そうなるのであろう。米国留学中にも、若い研究者や学生は、英語で書かれた専門的仏教辞典が無い為に苦勞していると、多くの人々から聞いた。仏教を専攻する者にとっては、日本語は研究上必須であ

り、それを修得している人が多いので、日本語の仏教辞典が利用出来、それほど問題にはならないが、他分野の研究者には日文字典を利用する事は難しい。道教学研究の場合も、仏教を全く除外する事は出来ない。特に文献研究では、二教が同じ用語を用いていてもその概念が異なる場合や、その逆の場合があるなど交錯している為、仏教と仏教語との正確な理解が必要である。

フランスの場合には、長い歴史を持つ東洋学の伝統の中で、仏教に関する優れた研究書・論文が多いばかりでなく、刊行途中ではあるが『法宝義林』がある。『法宝義林』は、昭和の初めから分冊刊行されている仏文の仏教辞典である。この辞典が優れている点は、仏教用語・概念の正確な理解が得られるばかりではなく、それに関する日本を含めた多くの研究書・論文を網羅しているので、ビブリオグラフィとしても利用出来る事である。事実、シンポジウムで会った若い研究者達は仏教について無知であるといいながらも、その仏教理解は決して低いものではなかったと感じられた。その程度の理解では問題であるとされるであろうが、彼等は今道教を研究しているのである。また翻って考えれば、日本の仏教専門以外の中国研究者が、どれほど仏教を知っているのであろうか。外国の研究に接して、それを全面的に讀みすることも、批判することも無意味なことであるが、『法宝義林』Hohogirin 刊行は偉大な仕事といえよう。

以上の様な面も知る事が出来、今回の参加は有意義であった。唯残念であったのは、当初参加予定で、パークレーでパリ再会を約してお

別れたストリックマン先生が来仏されず、ペーパーだけでしか御意見を知らなかった事である。

廣川堯敏——筆者の今回の渡欧の目的は大きくわけて二つあった。第一は国際日本学会と日仏東洋学会の二つの国際学会に出席することであり、第二はパリの国立図書館とロンドンの大英図書館に出版許可の交渉をすることと、あわせて大英博物館仏教特別展を見学することであった。そこで日仏東洋学会が始まる約二週間少し前の九月二十日に成田を出発、同じパリで開催された国際日本学会（九月二十三～二十五）にまず出席し、ついで国立図書館東洋写本部に通い、さらに十月四日、五日にはロンドンへ飛び、大英図書館、大英博物館を訪ねた。以上、渡欧の他の用件をすべて消化した上で、十月七日からの日仏東洋学会に出席したのである。

会場はルーブル美術館の対岸、フォンダシオン・ユゴの会議室で、入室が制限され、仏日の正式発表者および若干の、特別に許された傍聴者だけで始められた。したがって、それ以外の参加者は室外のロビーに特設されたテレビで傍聴するという方式をとった。両国の正式討論者同士の親密な討議を念願したシッペール教授の御配慮であった。実質討議の三日間（十月七、八、九）は連日午前九時四十五分から、中間に二回のコーヒー・ブレイク、および一時間半の昼食をはさみ、夕方七時近くまで（一日目は夜八時まで）続行された。丸々一日の研究討議、しかも昼食も対論相手といっしょに、さらには夕食後も討議続行

のスケジュール表を見て、フランス側のタフぶりに驚嘆したのであった。

そこで一々の討議内容の詳細な報告は他の分担者におまかせし、筆者はオブザーバーとして、一、二の感想を述べてみたい。

第一には道蔵のコンピューター処理についてである。我々一行は実質的なシンポジウムを終了した第五日目（十月十一日）に、ウィルソン大統領通りに面したアジア会館内の一室、道教資料・研究センターを見学した。そこでイレレーヌ・シェッフエル夫人とカロリス・ジスハヴェルマンド夫人より実演と詳細な説明を受けた。それによると、あと数年で道蔵一四七〇点全部のインプットを完了させる予定とのことであった。このような組織的な道蔵プロジェクトを目的あたりにし、これの仏教研究への応用の道もあれこれと考えさせられた。帰国した直後、コンピューター処理によって『摩訶止観一字索引』（山田和夫編、第三文明社、約一五〇〇頁）が出版されたことを聞かされた。おそらくこれから仏教研究の分野でも、道蔵の場合と同様、次々と一字索引が出版されることであろう。

これら道蔵プロジェクトを軸として、シッペール教授の強力な指導のもとに、今フランスには次々と若手研究者が育ちつつある感を強くした。日本は、研究者の層の厚さだけで、はたしていつまで対応できるであろうか。

第二には仏教と道教とのかわり、とくに浄土教の中国的変容と道教とのかわりについてである。筆者はシッペール教授から初期中国

浄土教と道教との関係交渉について宿題を頂戴した。無量寿仏信仰と不死長生の思想、曇鸞と陶弘景の『真誥』など、阿弥陀仏信仰の中国化と道教の諸問題について道教信仰の側に視点を置いてこれから考えてみたい。

終りに正式発表者でも何でもなかった筆者に対してシンポジウム傍聴をお許しいただいたシッペール教授、および福井教授に対し、その学恩に厚く御礼申しあげたい。

明神 洋——パリで日仏学術シンポジウムが催されるといふ話を、はじめてうかがったとき、正直なところ学問的興味というよりも、一度はフランスへ行ってみたくてという積年の願望のほうが先にありました。またオブザーバーということでしたので、ほとんど旅行気分での学会に参加したしいです。幸い、高橋先生のはからいでソルボンヌ界隈に宿をとり、十分パリでの旅情を満喫させていただきました。気候もよく、前半は、美術館をめぐったり郊外にある森などを散策したりの日々でした。ところが、いざ会議が始まってみると毎日が緊張の連続です。会議室はさほど広くなく、そこにシッペール教授をはじめ、ジェルネ教授、ロビネ女史といった著名な先生方が同席とあれば、ひと言もそのご発言を聞きもらすまいとしたからです。ただし残念なことには、自分の語学力はまだまだ未熟なので、その半分も理解できなかったと思います。三年前の CISHANN でも感でしたが、こういう国際会議では、外国語をひとつでも完全にマスターしておかなければ、

ということを改めて思い知らされました。とりわけ今回は毎日、昼食会が会議室の隣室で開かれ、フランス語のみならず英語や中国語も自由にとびかっていたので、一ヶ国語だけでは心もとないという印象も持ちました。もちろん、会議そのものにも緊張感がみなぎっていました。それは発表者に対して、あらかじめ *Discussant* が意見や質問を用意して、討論するという運営方法によるところが大きかったようです。またこの会議には、若い研究者たちも何人かまじっていました。ほぼ同世代の人たちの発表を聞くにつれ、自分も、語学的な問題を克服していつかこういう機会を得られたら、という思いを強くいただきました。

はじめに申しあげたように、今回の学会参加は、バリの町の雰囲気を楽しむというものが主たる動機で、その面でも、とても有意義なものでした。しかしこの学会を開催するにあたってはシッペール教授をはじめとする、諸先生方の大変な努力があったと聞いております。さらにホテルや昼食などの費用も、負担していただいております。このような機会を与え、支えて下さった諸先生や、関係者の方には心から感謝いたします。

最後に私事になりますが、翻訳を手伝っていた『盆栽の宇宙誌』(せりか書房)が、渡仏する直前に完成し、ひょっとすると、その著者であられるスタン教授にお会いできるのではないかと期待がございました。しかし、監訳者である福井先生と御一緒にシッペール教授の車で、直接スタン教授のお宅にうかがえるなどとは、思ってもいま

せんでした。スタン R. A. Stein 教授の業績など、まだまだはかり知ることのできない自分にとって、それがどれだけ貴重な体験であったのかというのが、今からふり返ってみて思う率直な気持ちです。

山田 均……道教とはおよそ関係のうすい分野を専攻している私が、この度コロックに行き、日仏両国の先端の学者の発表を聞かせていただけのも、一度国際的な学会というものを見てみたかった事と、前からフランスの東洋学に強い興味をもっていた事との両方で、福井先生にお願いして、云わば押しかけて行ったというわけで、そういう立場上、なんとか他の先生方の足手まといにだけはならないようにと願いつつ過ごした五日間でした。

ここで感想を述べるに先立ってこの機会を与えて下さった福井先生また会期前、会期中に御世話になった日本・フランスの諸先生方に改めて御礼を申し上げます。どちらも有難うございました。まず思い出しますのは、最終日にギメ美術館を訪問し、そこに集められた日本の宗教美術品を見学したことであります。申し訳ない話ですが、私はそれまで、日本の美術品がこれほどに強烈なイメージと、イクセントリックなまでの繊細さとを具えたものだとはついぞ思い至りませんでした。小さな厨子におさめられた仏像や神像は、どれもこれも実に生々しく、実在感にみちた、ショッピングな美しさを持っているように、私には感ぜられました。現在、私は丁度バンコックに勉強に来ておりますので、この度の参加にあたっては、カラチ、

イスタンブールと乗り継いで、約一週間ほどの時間をかけて、いくつかの国々を見ながらパリに着いたのですが、そのパリで最も新鮮な驚きを、まさに日本美術から受けたという事にも、ずいぶん大廻りをしたような、不思議な気持ちにさせられます。

ベルナール・フランク Bernard FRANK 教授の解説を聞きながら、教授の日本美術に対する造詣の深い言葉にはなんともいえない尊敬の念を抱きました。これらの美術品が収集された当時、フランス人が海を越えて行きついた果ての日本で、これら強烈なものに出会い、更に自分のものとして手に入れた時の興奮が、実にあざやかに伝わって来る気持ちが致しました。また、収集品のうちのいくつかのものについては、何処で、いかにして、手に入れることが出来たかというお話も聞かせて下さいましたが、その、コレクションということに対する非常な情熱と執念には、余程昔のことを語っていらっしやるにもかかわらず、たった今、旅行から帰って来た友達の話聞くように共感を覚え、興奮し、その成果に感嘆致しました。

次に思い出しますのは、実はこの度のロック会議とは直接に関係がないのですが、極東学院のことです。

極東学院へは、私は自分の専攻している東南アジア宗教史に関する調べ物をするために出かけて行ったのでありますが、インドシナ半島部の部長である P・ラフォン Lafont 氏、また、図書館で古写本を管理しておられるカキ・フィリオザ夫人 Kaki Filliozat 氏、いざなり訪問した一介の学生で、(もともと)後で改めて福井先生から紹介の

名刺を頂きましたが)しかも言葉も不自由きわまりない私を全く好意的に遇してくださり、様々な研究上の助言や励ましをしてくださいました。そのおかげをもって、私は二日間図書館に通っただけではありましたが、思っていた以上の得るところがあり、更に気持ちの上でも大きな励みとなりました。有難いこととつくづく思い出します。

また、私はこれほど多くのフランス人を見るのは今回が初めてのことでありましたが、どの人も個性をもった魅力的な人ばかりなのには驚かされました。

とにもかくにも、私にとりましては、フランスに行き、フランスの学問を垣間見る、という事が最大の目的でありましたから、その点では自分なりに満足して帰国することが出来ました。参加された先生方の面識を得ることが出来、これもまた、かけがえのない貴重な収穫でありました。毎日の会議が終わったあとや、その合間の時間、会場への道すがら、折にふれ先生方からいろいろの話がうかがえたのも大変有益な事でありました。フランスの事情や古い歌、めずらしい飲み物、食べ物など、カフェで、あるいは部屋で、夜更けまで教えていただいたのは、全て貴重な経験であります。

なにか、まとまりのつかない文章で、肝心の会議のことはざっぱり出て来ないのでありますが、どうか御許し下さい。これをおまじまして、私の感想とさせていただきます。

© 欧米『道蔵』研究プロジェクト班による道蔵の電算機処理の現状



道蔵のコンピューター処理は、今日の道教研究者が最も関心を持っている作業である。これについては様々な処理方法・システム等が考えられているが、実際に着手しているのは今のところ、シベール教授が主導するヨーロッパ道蔵研究班以外にその名を聞かない。この研究

班による作業は五年前の一九八一年から始められ、現在、道蔵全巻約二千種の經典のうち半分の一千種の經典が入力済みである。それは分量にすると道蔵のはほぼに相当するというから、すでに七〇%の経巻について処理が行われたことになる。しかし、この五年間のいわゆるハイ・テクノロジーの進歩はめざましく、五年前のシステムをそのまま使用していくには問題点も少なくない。このことについては入力担当者も認めており、向後何らかの改善が施されるものと思われるが、ここでは現状のみを報告しておく。

現在の入力は全て拼音<sup>ピンイン</sup>によって行われている。その場合、拼音表記の $\equiv$ はコンピューター処理になじまないため、 $\equiv$ を二つ続け、例えば $\equiv$ の場合には $\equiv$ のように表記する。また漢字一字毎に分立して表記し、熟語・詞名など二字以上連続する場合はハイフオンを用いる。例えば人名尹文操は Yin Wen-cao、唐・高宗は Tang Gao-zong と表記する。この方法はかつてヨーロッパ道蔵研究会に出席された小林正美氏(早稲田大学助教授、当時は講師)も提案されたと仄聞する。

中国人や日本人研究者にはかなり一般化した表記法であり、意味を理

解する上で優れた効果をもつものといえる。

これらの方法は、漢字入力が出来ないために考え出された便宜的な入力法であり、拼音表記はいわば漢字の符号化と考えればよいであろう。このような技術上の問題はともあれ、われわれの関心を惹いたのは以下に記す入力の内容と範囲であった。

REF. 道蔵ナンバー PAG. ページ (○葉 a・b) NOM. 人名  
 TZU. 字 HAO. 号 EMP. 皇帝名 AUT. 著作者名 BIO. 伝  
 記・人物記録 TIT. 官位官名・法位・法号 DIV. 神名・神号  
 ECO. 宗派・教派 LOC. 地名一般 ORB. 人物の出身地 SAN.  
 山名 LOU. 道観・寺院・祠廟 TEN. 神話の地名・天上界の名  
 DAT. 日時・日付 TOD. 人物の没年月日 SHU. 文献名 RIT.  
 儀礼(法) ICO. 画像 SUB. 別称 FUY. 符

これら二十三の事項が道蔵からの抽出対象となっているのであるが、最初の二項目すなわち REF と PAG は事項ではなく照会のベースであるから、正確には二十一項目ということになる。道蔵ナンバーは四桁の数字で表わされ、ページは巻数と葉数、そして冊子体であるから表裏が入力される。例えば、0028 1/3a は道蔵番号二八の一巻三葉の表となる。つまり右記二十一の事項について、それが記される冊・書名・巻・葉・表裏が入力される。因みに検索のモデルを一例挙げる。唐代の道観宗聖観を検索すると、

Zong-sheng guan

0590 : Dao-jiao ling-yan ji .TEX- 14/2b-3a トマンサーが

示される。すなわち、宗聖観 (Zong-sheng guan) は道蔵番号五九〇の『道教靈驗記』(Dao-jiao ling-yan ji) の巻一四・二葉の裏から三葉表に記される。以上の事項は、既に気付けたことと思われるが、そのほとんどが固有名詞であり、哲学的概念や宗教上の思念が含まれていない。二十一の抽出事項は数度にわたる追加によって現在の数になったようであるが、既に『』を消化したいま、新たな事項を追加することは困難であろう。

このように入力されたデータは、六ヶ月に一度つつ更新され、フルファット順に各事項が配列され、約一〇センチ四方のマイクロシート(これ一枚で約一〇〇ページ分の収容能力がある)にプリントされる。残念ながら現在このプリントを支給され、もしくはソフトウェアを利用できるのは、このプロジェクトの協力者(日本人では二、三人)だけのことである。いずれこの公刊も予定されているが、かなりの大冊となることは必定で、既にタイプ用紙にして高さ五〇センチ程の量となり、そのためにマイクロシートに変換したとのことであった。

以上、簡単に道蔵文献の処理について記したが、今春刊行の日本道教学会『東方宗教』六七号誌上にも詳しい報告を予定している。

なお、これと併せて、本『学会通信』の前号(第四号)に載った金岡先生のフランス学事情報も是非参照されたい。

#### ◎ 第四回日本研究国際会議 開催

FOURTH INTERNATIONAL STUDIES CONFERENCE ON JAPAN (EASIS) が、右のロケットに先立って、次のように開催された。フランス側主催者の中には、フランック B. FRANK、ヘリマン F. HERAIL、ロベール J. N. ROBERT、ロタルムント H. ROTERMUND の諸氏のように、ロケットと重なる方々も多かった。日本人としては、伊東俊太郎、河竹俊雄、京戸慈光 (“The Bases and Development of Japanese Buddhism” — the Oral Transmission of Doctrine and the Tendai Teaching concerning “Hongaku” にて発表) の三氏の発表者、および福井文雅(研究発表を求められたが、これに続く日仏ロケットとの関係から、残念ながら辞退した)、広川堯敏等が出席していた。

Dates 会期 : Monday 23 September to Wednesday 25 September 1985

Thursday 26 (8.00-16.00) Excursion to Chartres, Lun-  
ch at Chartres

Place 会場 : Ecole Pratique des Hautes Etudes, IV<sup>e</sup> et V<sup>e</sup> Sec-  
tions (Sorbonne) フランス国立高等研究院 第四、第  
五部門 (ソルボンヌ構内) et また Collège de France  
ロレーン・マ・ユ・フランシス

Secretary : Professeur Hartmut O. ROTERMUND (EPHE V<sup>e</sup> Sec-  
tion/Centre Japon) 19, Avenue d'Iéna, 75016 Paris,

France, tél: 723 41 81

事務局長 ハルトムート・ロツテルムント(同右 第五部門・日本センター教授)

Opening and closing sessions: Amphithéâtre Richelieu/Sorbonne

開会・閉会式: ソルボンヌ構内 リシュリユー講堂

#### 学会活動

○ 一九八五年十二月三日(金) 赤門学生会館にて

「第四回日仏学術シンポジウム・東洋学部門」の報告会を開催。

○ 一九八六年二月二七日(木) 日仏会館にて

国立科学センター(CNRS) 研究主任 モーリス・コヨール

Maurice Coyaud 氏講演

「朝鮮と日本の説話——共通性と民族的特殊性」(“Contes coréens

et contes japonais: fond commun et spécificité ethnique”)

日仏会館と共催。

○ 一九八六年三月一三日

「会員自己紹介」のアンケートを発送。

#### 会員消息

○ 山口瑞鳳氏が、フランス・アジア協会 Société asiatique の名誉会員 membre d'honneur に推挙された。

#### 新刊紹介

○ 新田大作編『中国思想研究論集——欧米思想よりの照射』(雄山閣出版、一九八六年)が出版された。新田氏を中心にした「哲学交渉史研究会」の研究成果である。執筆者は新田大作、清水多吉、宮崎功、彌永信美、小泉仰、多井一雄、坂出祥伸、野村邦近、家井眞、河田第一、村山吉廣、金岡照光、クラウス・リーゼンファー、バー、フラン・スパンバーク(石井公成訳)の諸氏。

#### 新入会員

福島 仁

FUKUSHIMA Hiroshi

前田 繁樹

MAYEDA Shigeki

編集後記

現職 早稲田大学大学院博士課程  
専攻分野 六朝宗教史

山田 均

YAMADA Hiroshi

今回は「第四回日仏学術シンポジウム特集」として、昨年（一九八五年）一〇月のパリにおける「道教と日本文化」をテーマにした学会の模様の詳細をお送りします。たいへん「しんどい」学会だったとのことですが、それだけに突り多いものだったことが、この特集からも見てとれることと思います。この学会の詳細な内容は、近い将来、パリで *Actes* が出版される予定です。今回はこの特集のため、異例の分量の通信になってしまい、また発行時期もずれこんでしまいました。次回は、三月にお送りした「会員自己紹介」アンケートの結果報告を中心とした内容になる予定です。

なお先般、パリのミュゼ・ギメの図書館より申し入れがあり、本通信を同図書館に送ることになったことを御報告します。これまで本通信はフランスの公的機関には一部も送っていなかったことを考えると、これが広くフランスの東洋学者の目に触れるようになることは当然でもあり、喜ばしいことと思います。

本通信の第二号以来、印刷を依頼している株式会社東京プレスの特別の御好意なしには、本通信は刊行できません。この紙面をかりて、深い謝意を表わすものです。

(N・I記)

森安孝夫